

IS CRAZYな一夏

ZUNEZUNE

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したもので  
す。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を  
超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

一夏?…いえ、狂人です。

めちゃくちゃなキャラ崩注意! 原作未読のにわかなので注意! 初投稿なので注意!

# 目

# 次

C R A Z Y B O Y	暴走一夏！嘆くMOP!	E N G L A N D の B A N A N A !	C L A S S の C R A Z Y P A R T Y !	O N E S U M M E R の C H E A T
6	1	35	31	S !
M O P と の S H A R E D R O O M !	T I M E !	C H I N E S E P I G の L U N C H	C H I N E S E P I G !	
10	14	39	39	
M O P & B A N A N A と の E X E R C I	S E !	E L E C T R I C I T Y な O N E S U	E D M A C H I N E	V E R S U S B L U E B A N A N A
43	47	51	22	27
C H I N E S E P I G v s N E W	M M E R !	C R A Z Y B O Y の D E S I G N A T	E D M A C H I N E	V E R S U S B L U E B A N A N A
31	I	18	14	!

85	M O P の C H A N G E	B A T T L E	P I G	O N E S U M M E R & C H I N E S E	E S E P I G !	O N E S U M M E R v s C H I N E, C H I L D !	O N E S U M M E R & C O N C U B I	M E M B E R !
	R O O M !	A F T E R !	v s U N K N O W N !	I S の 正体 !	IRREGULAR !	SUMMERが受けるLESS	SUMMER&CONCUBI	EXCHANGE STUDENT 現る
						ON !	ONE CHILD !	!
		76				UDENT 現る !		
						SECOND EXCHANGE ST		
						ONE SUMMER v s CONC		
						UBINE, CHILD !		
						N !		
						参戦した SCHWARZER REGE		
						GERMANY GIRLのCLAIM		
						111	106	102

!

ONE SUMMERのPAST!

119

FRANCE GIRLのSECRET

!

ATROCITYなGERMANY

IRL!

激震！ANGRYなONE SUMME

R！

BRUISEDなENGLAND&CH

INESE GIRL！

申し込まれるPARTNER！

史上最大のINVASION！

146 141 137

H 133

G 123

115

決戦！ONE SUMMER PAIR

VSGERMANY GIRL

AIR!!

DOUBLE REVIVES！

155

CAN, STOPなラウラ！

159

ONE SUMMERのNEOWHI

TE！

163

151 P



# C R A Z Y B O Y

『史上初！ISを起動させた男性、日本に現る！』

驚愕のニュースが世界を駆け巡る。

本来女性にしか使えない『IS』を男が起動させたという物だ。

世界の常識を壊すにはこれだけで十分だつた。

そんな彼『織斑 一夏』がIS学園に入学するというのだ。  
同じクラスの女子は皆興味があつた筈だ。しかし：

「ええっと…織斑 一夏君は…」

山田先生の困った声に皆心の中で「だろうな」と思う。

肝心の彼が教室に来ていない。現在クラスメートの自己紹介が終わつたところである。

「山田先生、気をつけた方が良い」

「え？」

そんな一夏の姉である『織斑 千冬』は呆れた顔で山田に忠告する。

「あいつのことだ。遅れてやつてくる」

「遅れて……？」と皆が心の中で疑問を感じていると…

ドンッと扉が開く。

そして扉を開けたのは…

「…」

なまはげだった。

「え…？」

これには大人である山田も驚きを隠せない。

生徒達だつて開いた口が塞がらない状態だった。

「…」

なまはげは黙つたまま先生2人を押しのけて教壇の上に立つ。異様な光景に誰もついていけない。千冬だけが「やれやれ…」と頭を抱えていた。

なまはげは一度教室全体を見渡すと、仮面をはずそうとした。

「…ゴクリ」

教室内の全員（千冬を除く）が息を呑む。

なまはげは仮面に手を掛けたまま動かない。

外すのか、外さないのか、どっちなのか。

「…もつてんのか？」

「「「…はい?」」」

「外すと思つてんのかあああ!??」

仮面越しから奇声が飛び出た。

「お前ら俺が仮面を外すと思つてんのか!?何で知らない人に顔を見せなきや行けないんだよ!?なんでなまはげって秋田なの!?何でソーセージじやなくてきりたんぽなんだよおおおおおおおおおおおおおおおお!!!!」

教卓の上で暴れるなまはげ!!!!その言葉は一切理解できない。

「おい山田あ!!分かるか!?’

「は、はい!?’

「分かるかつて聞いてるんだこの緑メガネええええええええええええええええええええええええええええええええ!!!!」

「み、緑メガ…」

「何でなんだよ…なんで智三さん死んじやつたんだよおお…何でシャーペンはボールペ  
ンに進化しないんだよおお…」

「え、ええと…」

「返事をしろ!!!!」

「は、はいいい…」

急に攻められ始めた山田は今にも泣きそうだった。そこで千冬は出席簿で1回殴ろ  
うとするが…

「真剣白刃どり!!!!」

と言つて自分の人差し指を自分の目に突き刺す。

「あがあああああああああああああああああああああああああああああああああ  
ああ目があああああああああああああああああああああああああああああああ  
ああああああああああああああああああああああああああああああああああ  
ああ!!!!」

これにも千冬もびっくり。自分で自分の目を攻撃して苦しみ始めた。

「こ、ー、の、カ、ツ、プ、ラ、ー、メ、ン、め、つち、やお、いし、いいいいいい  
い!!!!」

などと黒板に何度も頭をぶつけながら叫んだ。

何だこれは…

今起こつていることを説明しよう。

なまはげがきた→山田先生にキレた→自分の目に攻撃した→カツラーメンおいしいいいいいいい!!!

うむ、訳が分からぬ。

なまはげは急に黙り込んで、仮面を外して皆の前で素顔を見せた。

「織斑一夏です。趣味はさつき言つた通り盆栽にチーズをぶつかることです。三年間よろしくお願ひします」

そう自己紹介して自分の席に着く。

こうして、最悪の狂人である織斑一夏のIS学園生活は始まつたのだ。

# 暴走一夏！嘆くMOP！

「舞踏会」  
ジヨーカー

紫と赤のIS。ワンオフ・アビリティーは周囲の機械類をハッキング、そして自由に捜査可能。ISも操れるチート機能。東が一夏の為に作った第4世代。

## 主な武器

・ハーレイクイン

巨大な打撃装備。後ろのジェットで威力と速さをUP。

・デッドショット

狙撃武器。撃つた弾丸を見えなくしたり曲げたり出来る。

・エンドチャントレス

自分のシールドエネルギーを相手のシールドエネルギーを吸収して回復

できる。

「おい…一夏」

顔を知っている女性が話しかけてきた。数年ぶりに会うファースト幼馴染の「篠ノ之箒」だ。

「おい…おい！」

一向に返事がこないので嫌気がさしたようだ。勢いよく一夏の机を叩く。

「何だ箒、今私様は趣味活動の最中だぞ」

「趣味だと…!?」

「自己紹介の時言つただローズ！盆栽にチーズかけんのが…」

「違うだろそれは！」

一夏は自分の机の上で争つてゐるタコとカブトムシを見ながら歯を磨いていた。

「どこが盆栽だ！どこがチーズだ！植物や乳食品すらないぞ！」

「まあ落ち着けよ箒星、何か用か？」

「箒ぼ…!?まあいい、屋上に来てくれ。話があ…」

「イヤツホオオオオオオ!!!漁夫の利でオオカミウオガ勝つたぞ!!」

「話を聞け!!」

屋上にて

「ほーらオオカミウオちゃん。景品の秋刀魚の目ですよ~」

一夏は呑気にオオカミウオに餌をやつていた。

「いい一夏!!この数年で何があつた!?!』

「何もナツシングドンツインテールですけど?」

「大有りだ!!あの時の貴様はこんなに狂つていなかつた!」

「それはもう過去の話だぜホルホース、今の俺は世界一ふざけた男なんドロー!!魔法発動!」

「なつ…」

駄目だ、会話が成立していない。

こうなつたら最後の望みだ。中学校の頃の部活の話をするのだ。まだ望みがあるかもしれない。

「一夏!貴様中学校の時部活はどこに入つてた!」

「ええつと…確か剣道部…」

「!!」

良かつた。一夏は自分との思い出を忘れていなかつたのだ。そう思つたのだが…

「…が四月で、五月が文芸部、六月が卓球部、七月が昆虫部、八月が闇鍋部かな?」

「は?」

「俺はルールに縛られない自由な男、いつでも俺が世界の中心なんだルンバ!掃除機!

「き、貴様あああああ!!!」

「ライオン!」

「等は怒り一夏に襲いかかるが…」

「シールドトリガー発動！聖なるミラーフォース！」

一夏はそれを簡単に避けてしまう。

「何？」

「もつとホットドックに行こうぜモッピー、落ち着いて米泥棒をしよう！」

「くつ…！」

「おつと授業が始まる。急ごうか」

そう一夏は逆立ち歩きで教室に向かう。

「一夏あ…いつたいどうしてしまったんだ…」

一方等嘆いた。

# ENGLANDのBANANA！

「ちよつとよろしくて？」

金髪の少女が俯いている一夏に話しかける。

「ちよつと…？」

一向に返事が来ない。顔も合わせてこない。

「ちよつと！聞いていますの！？」

「…ス？」

「ス？」

「スイカアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア!!!!」

「ひいい!?」

顔を上げた一夏はいつの間にかカボチャの仮面をしており、奇声を上げながら金髪少女に問い合わせる。

「トリックオアトリート？」

「へ？」



全員がドン引きしている。

そんな一夏と目が合う。小さな悲鳴を漏らした。

「何だお前？」

「わ、私を知らない?!このセシリ亞・オルコットを!?!」

驚きを隠し、普段の自分を演じるが…

『オシリガ・ピラミッド』?』

「誰のお尻がピラミットですの!!」というよりいい加減ピラミッドから離れて下さい!』

「六法全書辛いいいいいいいいいいいいいいいいい!!!」アー!!!

「六法全書からもですわ!!」

勝手に自分で苦しむ一夏に怒りを覚えるセシリ亞。

「分かつた。ピラミッドから離れよう。それで『バナナ・ツタンカーメン』が何のようだ?  
?」

「全然離れていませんわ!!」というよりバナナって何ですの!』

すると一夏はセシリ亞の髪を優しく摘まみ、

「誰の髪がバナナですか!』

「そのバナナを分けてバナナパンマン!』

『はーい私のお髪をお食べ！』って何やらせるんですの!?

「ほーら餌ですよー！」

すると一夏はズボンの中からタコを取りだしセシリ亞の髪に近づけた。  
「ひいいいいい!!何故ズボンの中からタコが!!」

「可愛いんだろう?名前は『大阪の非常食』っていうんだぜ!」「やめてください!それを!それを近づけないで下さい!」

「次いでカブト虫の『J・レノン』も:」

「いやああああああああああああああ!!!!」

あまりの恐怖にセシリ亞は教室を飛び込んで逃げ出した。

「あ!鬼ごつこ!俺オーラクやるからセシリ亞女騎士ね!!」

そう言つて全力でセシリ亞を追う一夏だつた。

# MOPとのSHARED ROOM!

「ここか…」

一夏は寮の自分の部屋の前にいた。  
そして部屋へと入り、中を確かめる。  
まるで高級ホテルだ。流石 I S 学園。  
しかし…：

「足りんな…！」

部屋を見て何かを企むニヤケ面をする一夏。  
しかし一夏は自分意外に誰かいるとは知らない。  
今シャワーを浴びている等も、一夏が入ってきたことを知らない。

「ふう…さつぱりしたな…」

「ひつ!?」  
シャワーを終えて出て来た等だが…：

扉を開けた先にいきなり着物を着た鉄鎧がいたから驚きだ。

「な、なんだこれは!?」

数分見ていいないうちに、部屋はもの凄い変わりようだつた。  
二つのベットの内、一つの方の上にはヒトデがびっしりと張り付いており、自分が使つている方の上にはクリスマスツリーが倒れていた。

鏡にはフランスパンが数本突き刺さつており、机の上にはカブト虫が入つたムシカゴとタコの入つた水槽。

窓の向こう側からゾンビの模型がこちらを凝視しており、天井にはテレビゲームが吊されていた。

この地獄絵図、誰がやつたのかは分かる。

「ただいま！」

すると誰か部屋に帰つてきた。それは巨大なダンゴムシだつた。

「なつ!？」

いや、正確にはダンゴムシの着ぐるみを着た一夏だつた。

「いいいい一夏!!また貴様か!?」

「何だルームメイトいたの蟹、しかもポニーソードか」

「何だ!?この部屋は!!貴様がやつたのか！」

「そ、うだよ、何か物足りなくテールナー!!俺が模様替えしたんだヨーテリーラー!!」  
着ぐるみから出て来た一夏はどこぞの博士の格好をしていた。

「ここで一句。

ボルボロス

シャチホコ付けたら

福沢諭吉

「字余りだ!!」

「皆もポケモンGOで、アクシデントじゃよ~」

「ええい訳が分からん!」

筈がバンと机を叩く。

「一夏!この部屋を元に戻せ!!」

「嫌ツシングドレツシングなんですけど?」

「私は今の部屋の方が嫌だ!」

「それよりもお前、見えてるぞ」

「何が!?」

「胸のチヨココロネ」

「ここで筈は着替えてないことに気付く。」

「あつ…貴様ああああああああああああああああ!!!!」

遂に怒りが頂点達した筈は、木刀で攻撃したが…

「おいおい…いいのか…? お前の木刀が消し炭になるぜ…!」

そう言つて一夏が懐から取り出したのはドロドロに溶けたチョコレートパフェだつ

た。

「そんなもんで私が倒せると思ったかああああああ!!!」

「甘い! これでフイニッショだ!!」

一夏はグラスの底にあるスイッチを押した。

『3秒後に爆発します』

「えつ——」

こうして一夏と筈の2人は、部屋を失い、廊下で寝るはめになつたとさ。

「ああ!! たこ焼きが!! たこ焼きの豪雨がフイニッショ武田をデストロイして…ZZZ  
(寝言がうるさくて寝られん…!)」

# Q U A R R E L 売りのG I R L !

「これより来週行われるクラス対抗戦の代表を決める。誰かいるか？」

「織斑君がいいと思います！」「私もそれに賛成です！」

クラス対抗戦の代表に一夏が推薦される。

「ということだ織斑：つて貴様は何をしている」

「え？ 何つて、ミニ人工太陽を使つてのバトミントン大会ですが」

一夏の机の上では、2体のブリキ人形がフ拉斯コの中に入つた人工太陽をラケットで打ち合つていた。

「授業中にするなそんな世界を終わらせそうな事を！」

「はいはい：クラス対抗戦でしよう？」

「何だ？ やる気があるのか」

「まあ：面白そうですね」ニヤリ

(（企んでいる：絶対何かを企んでいる！））

一夏の笑みにクラス中が恐怖し、彼を推薦した者達は少し後悔した。  
するとセシリアが勢い良く立ち上がり抗議する。

「納得いきませんわ！男がクラス代表なんて良い恥さらしですわ！」

「そうよそうよ！男なんて信用できない！」

それに対し、いつの間にか女装した一夏も参戦する。

「？…このセシリア・オルコットを差し置いて代表などと認めませんわ！」

「うんうん、確かにカエルの家にある傘立てはチュパカブラに似てているけど、やっぱり国語辞典のリモコンは割り箸が良いと思うわ！」

「……大体文化においても後進的な日本で暮らすこと自体が私にとつての屈辱なんですよ！」

「そうだそだ！日本バー！日本人なんて蜂蜜漬けの色鉛筆だぜ！」

「……」

「バーカバーカ！日本人なんてバーカ！極東の猿め！タマゴが頭に落ちて死ね！」

「貴方のことを言つているんです！」

「あ？俺ですか？」

「貴方！自分の国が馬鹿にされているのに悔しくないんですねの？！」

「別に日本にもイギリスにも『明太子に乗つて相手の首を切る祭り』はあるしなー」

「ありませんわ!!私の国にそんなふざけた祭りは!!」

日本にもねーよ、クラスの日本人がそう思つた。

「…決闘ですわ！私と戦いなさい！」

「おいおいいいのか？お前は俺に勝てんさ…」

「男の分際で何をほざくんですか!?」

「俺には最強の助つ人がいるからだ！来い！俺の相棒——」

「舞妓・カルロス！」

「ドウモ、マイコ・カルロスデス」

そう言われて出て来たのは舞子の服で女装した筋肉系黒人だつた。

その異形の者にある者は悲鳴を上げ、またある者は泡を吹いて倒れる。

「何だ貴様!?」

「俺の友達、舞妓・カルロス。スチュワーデスを目指す67歳の男…いや女性だ」

「「舞妓じやないのかよ！」」

「まづどうやつてここに侵入してきた!?」

「俺が抜け道を掘り掘りホリー・ジョースターしたからですが!?」

「貴様の仕業か―――――!!!」

「ゲボオア!?」

一夏は千冬に殴られ空へとぶつ飛ぶ。

「うわーこんなに飛べるんだ俺って…」キラーン

こうして一夏とセシリアの決闘が決まった。

# C R A Z Y   B O Y の D E S I G N A T E D   M A C H I N E

「織斑、お前のISだが、準備に時間が掛かる」

千冬が授業前に言つてきた。

「だから学園が専用機を用意するそうd——」

「もう持つてまスルメ！メダカの♪学芸会♪」

「何？」

「束さんサンムーンが俺のために作ってくれたんでスパンキング！オウ！イツツ  
ビューティー！」

対する一夏はハリセンで自分の二の腕をひたすら叩いていた。

「…聞いてないぞ？」

「聞かれてませんマシン魔進チエイサーですから」

「…放課後に私の所へ来い」

「分かりましタンク！ゴーゴー！」

すると一夏は突然戦車のかぶり物をして泡だらけの格好になり、教室を勢い良く飛び出た。

「燃えろ一夏…………!!!!」ドタバタドタバタ

「待て一夏!?どこに行く…………!!!!」タツタツタ

それを千冬が追うが、確保できたのは今から12時間後だった。

「で？お前の専用機は？」

「あ、T H I Sです」

一夏は待機状態のI Sを差し出す。

「束の奴が…一体いつ頼んだ？」

「学園に入学する前に、俺が電話で頼みました

「そういうのは…最初に言つておけ…」

千冬は大きな溜息を吐く。

「こいつの名前は？」

「たこ焼き目玉焼き根性焼き」です

「…データでは「お前がママになるんだよ。舞踏会」と書いてあるが…？」

「あ間違えた事案発生です」

「全然違うわ馬鹿者ー！」

と、千冬が本の角で殴ろうとするが・

「山田！出番だ！」

「はい！？」

すぐ近くにいた山田を逆さに持ち上げ、盾にする。

真剣山田こいこ――――――

それにより千冬の本攻撃は山田の股に勢い良く当たる。

一  
おおうー！

一山田先生

女性にとつても股は急所、白目を向き、ぐつたりと倒れた。

「何でこつた!? 山田先生が死んじやつた! ? この——」

「人でなしほ貴様たゞ――――――！」トコホホ

一  
うけつ  
一一一  
一一一  
一一一  
一一一

千冬の拳を受ける一夏、彼も白由を向く。

「ダイジヨーブデスカ!? イチカサン!？」

そこに舞妓・カルロスが入ってきた。

「オノレヨクモイチカサンズ―――！」

その舞妓・カルロスも千冬に襲いかかってくるが：

「おらああ!!」

千冬の回し蹴りを首に喰らい、泡を吹いて気絶する。

「蚕・ボブ―――!!」

目を覚ました一夏が舞妓・カルロスの敗退を目にしてたとき、彼女との青春が脳裏に浮かんだ！

「オウ イチカサン！ソコハユウセンセキデスヨ！ポップダンスをオドライデクダ  
サ――イ!!」

「オウ イチカサン！ソノジョセイハオネエサンデハアリマセ――ン！ハヤクジユカイ  
ニステテキテクダサ――イ!!」

「オウ イチカサン！コンナマチナカデダイタンデス――ヨ!!」

「よくもボブを――!!うおおおおおおお!!」

涙を流しながら千冬に襲いかかつた！今は亡き、彼女のためにも！この女は、チヨコ  
レーント漬けにしなければいけない!!

「甘い!!」

しかし窓から投げ捨てられてしまつた。

「ハア…ハア…ハツ!?

正氣を取り戻した時には、職員室は死屍累々となつていた。

# VERSUS BLUE BANANA!

「大丈夫か？一夏」

待機室で筈が聞いてくる。対する一夏はマグロの頭を担いでバク転していた。  
「W H A T が？」

「お前は今日まで何もしてこなかつた。それなのに代表候補生と戦えるのかと聞いてい  
るんだ…ええいバク転をやめろ！」

「大丈夫ダスト、負ける気がしないぐらいグラムだぜ！」

「その自信は一体どこから来るんだ…」

「何だつてこいつは…」

一夏は待機状態の I S を見せる。

「俺以上のクレイジーダカラナ」

「一夏…？」

「言つてくるぜ。筈」

その時の一夏の姿は、長年自分が求めていた一夏の人間像その物だった。

「織班一夏 舞踏会、出る！」

ジヨーカー

赤と紫の妖艶な外見、外国の紳士を思わせるその形、背中からはコウモリのような翼。これぞ一夏の専用機である舞踏会である。

「来ましたの、逃げ出したのかと思いましたわ」

「まさか、俺はどんな物にも背を向けない。例え英國の不味い飯でもな」「……最後に土下座でもしたなら許していましたが、残念ですわ！」

そう言うとセシリアは4機のブルー・ティアーズを開幕する。

「さあ！私セシリア・オルコットとブルー・ティアーズの奏でるワルツで踊りなさい！」  
「何言つていやがる。俺は『舞踏会』だぞ？踊るのはお前だ！ケツデカピラミッド！」

「誰がケツデカピラミッドですって!?」

怒りに任せてセシリアはビームを撃ちまくるが、一夏はそれを華麗に避ける。

「なっ!? 全部避けた!?」

「今度は俺だ！殺戮女神！」

すると一夏はどこからか巨大なハンマーを取り出す。

「遠距離タイプのブルー・ティアーズに近距離格闘武器で挑むなんて…笑止ですわ！」

「それが…どうした!?」

一夏の速さが一段と上がる。ハンマーの後ろのジェットで自分を加速したのだ。

「なつ!?

「おらあ!!」

そしてハンマーの重い打撃でセシリアは地面に叩き落とされる。

「な、何て威力…」

「どうした? もつと頑張れよ、プリンちゃん」

(今までのふざけた性格が嘘のように…どうなつていてますの?)

「来ないなら、俺が面白い物を見せてやる!」

一夏が何かを操作すると、紫色の波動が辺りを包んだ。

「な、何ですの!?

異常は観客席で起きる。

「な、何これ!」「私のＩＳが勝手に!」「どうなつてんの!?

見ていた女子生徒の打鉄が勝手に起動、及び無人で動き始めた。

大量の打鉄がバリアーを無理矢理突き破り、アリーナに侵入してくる。

「何がどうなつて…」

次第に数多の打鉄達は一つの形へと集中して粘土細工のように固まり、巨大な右腕の形になつた。

「これぞ新技・名付けて鉄屑の銀河！」

# ONE SUMMERのCHEAT IS!

「さあ…行くぜ！」

一夏が右腕を上げると、打鉄でできた巨大な右腕も連動する。

「鋼鉄の隕石！」

拳を握り、巨大右腕がセシリリア目掛けて振り下ろされた。

「きやつ!?」

巨大な鉄塊が落ちてきたので、セシリリアは吹っ飛び、地面にはクレーターができる。右腕は手を広げ、セシリリアを蛇のように追い回す。

「そんなに大きければ、動きも遅いはず！このブルー・ティアーズには追いつけませんわ！」

「それは…どうかな⁈」

一夏は指揮をするように、指を振る。

「鉄の砂嵐！」

すると右腕の形に集結していた打鉄達が一斉に分離した。

「なつ…!?」

数十の機体が一斉に襲いかかってくる。

(このI-Sを操作する能力…恐らく私のブルー・ティアーズとは違つて自動操作が可能…！…そうでもなければ一斉にこんな数を操れませんわ！)

そう考えるのも無理はない。しかし…

「きやつ!?」

大量の打鉄はまるで人の意思があるかのようにそれぞれと連携してセシリ亞を追いた！

(まさか、全部あの男が動かしていますの!?)

本来人間は2本の腕を同時に動かすのがやつと、しかし一夏は数十の腕を一斉に操つた！

打鉄達はまた腕の形となり、セシリ亞を握つて捕らえた。

「ま、まさかこの私が…！」

「もつと楽しませてくれよ、英國女」

一夏はハンマーを構える。

「行くぜピッチャー!!」

すると右腕は一夏目掛けてセシリ亞を投げる。

そしてそれをハンマーで打ち返したのだ。

「ナイスホームラン……！」ニヤツ

セシリアはバリアに当たり、地面に墜落する。

「さてと……そろそろ終演だ！」

「なつ!? ブルー・ティアーズが勝手に……」

まさか、戦闘中のISまで操れるのか？

「……最初からこの手を使えば良かつたのに……私を舐めていましたの!?」

「舐めてなんかいなさい。だがお前は言つた。『日本は文化的にも後進的』だと……」

「ここで一夏の顔が『してやつたり』という顔になる。

「それこそ、日本を舐めるな。日本は世界で最も……」

ブルー・ティアーズのビットが自分自身を狙う。

「――ノリが良い国だ!!」

操られての自滅。セシリアは自分のビームで敗北した。

「ま……まさかこの私が……！」

「日本を学ぶんだな……今度面白い映画を見せてやるよ！『火垂るの墓』なんてどうだ？」

その後、打鉄達は元の使用者に戻っていく。

「悪かったな、折角のステージだつたから2人じや寂しいと思つてな……」

!

「じゃ、どうも見て頂き…」

頭を下げ、お礼を…

「ありがとうございマスカレードブドウ!!」

普通にしなかつた。

# CLASSのCRAZY PARTY!

「織斑くん、クラス代表決定おめでとー！」

クラッカーの音が鳴り響く。一夏の持参したバズーカは没収されたが、会場は盛り上がりっていた。

「「おめでとー!!」」

それと共に拍手が一夏を祝った。

「いやーどもども、すま梨葡萄と林檎ダンサーだな」

言つてることは意味不明だが、一夏はこのクラスに歓迎されていた。

「あの…一夏さん、少し良いですか？」  
「ん？」

スルメの足でリボン結びしている一夏にセシリアが話しかける。

「先日は貴方や日本のこと馬鹿にして申し訳ございませんわ」ペコリ

「いいや、俺だつて飯が不味いとか言つたりバンジージャンプでゴーヤ落としたり三日後にお前に泥食わせるからごめんな」

「最初のはともかく二つ目は知りませんし三つ目に至つては未來形ですの!?」

「ね～ね～織斑君の専用機つてどうなつてんの?」

「何で操れるの～?」

「それはだなあ、俺が世界一格好いい冷やし中華の専属メイドさんだからだ!」「お前は男だろ!」

今度は箒が突つ込む。

それにともない周りの女子達も笑い始めた。

「なんか最初はドン引きしたけどこうして見ると面白いね～!」

「私なんか毎日録音してるよ～」

「え? 録音されてるの!? 口臭大丈夫!?!」

「口臭は関係無いだろう!!

またもや箒が突つ込んだ。

「オリムーってどんな子が好みなの～?」

「!!」

その言葉にセシリアと箒がいち早く反応した。

「そうだな～えら呼吸してれば誰でもいいや」

「哺乳類ですらないのか!」

「どうしようもないですわ！」

「そう2人が落胆していると…」

「ども、新聞部です！」

「そう言う俺はトマトです」

「そうやつていつの間にかタバコ瓶の格好した一夏が返答する。

「回文ではないか！」

「しかもそれはタバコですの！赤繋がりですわ！」

「あはは～！噂通り面白いね～！一枚良いかな？」

「一枚7500河童な」

「どんな単位ですかの!?」

「行くよ～ハイチーズ」

パシャッという音声と共に写真が撮られる。

しかし、右端に舞妓・カルロスが写った。

(結局このいつ(この人)は何者だ(ですの)?)

「おうカルロス、何か用か?」

「モウイチカサンタラ、カクシゲイヲミンナニミセルツテイツテタジヤナイデスカ」

「そうだつたな！皆見てくれよ！」

「何々～？」

「どんなの～？」

クラスの視線が2人に注がれる。するといきなり舞妓・カルロスが脱ぎ始めた。

「「ヅツー——！？！」」

皆が吹く。そして舞妓・カルロスの強靭な肉体がさらけ出される：ズボンも下着も脱いだが、股間と尻は『大阪の非常食』によつて隠されていた。

「ではお楽しみ下さい！俺と舞妓・カルロスの『ドキ！男だけの相撲大会！ポロリを見ねえと殺すぞ♪』を！」

次の日、一夏以外のクラスの皆は学校を休んだ。

# 参上！現れたCHINESE PIG！

「もうすぐクラス対抗戦だね！」

「そうだ、2組のクラス代表が変更になつたって知ってる？」

「ああ～転校生に変わつたってね」

「転校生？」

クラス代表になつたから興味を持つたのか、海栗でのジャグリングを止める一夏。

「中国から來たんだって：：つて織斑君なんでそんな手血だらけなの!?」

「目覚まし時計と喧嘩してな」

「先程まで海栗でジャグリングしていたからですわ！」

（こ）でセシリアが割り込んでくる。

「ま、私の存在を危ぶんでからの転校生ですわね！」

「ほれセシリア、今日の分のステイツク糊」

「私そんな物を毎日受け取つてなんかいませんわ！」

「どんな奴だろ～？俺より変な奴だといいな～！」

「「それはないでしょ」」

クラスの全員がそう断言した。

「まあ今のところ専用機持つての1組と4組だから余裕だよー！」  
「その情報古いよ！」

「2組の専用機持ちがメギヤツ!?」

上から落ちてきたルービックキューブに頭を攻撃された。

「いたた…」

そして暫く頭を押さえ怒り始める。

「誰よ！ 黒板消しの如くルービックキューブを扉に仕掛けたのは！ 角が刺さつたじやないの!!」

「織斑ですが？」

「そんな某佐野菜見先生の作品みたいな申告の仕方しても…ってアンタなの!?」

「おう、ひさしごスケットが二つだな、鈴」

「もう訳分かんないし！ 本当アンタ一夏!?」

鈴が疑うように睨む。

「そうだな、じゃあ証明として…小五の頃…」

「…！」

「男子生徒のつむじに地球儀刺したのは良く覚えてるよ」「私そんな事したことないしやる人間もいないわよ!」

「…誰ですか？」

「一夏と親しそうに…！」

「鈴：何かつこつけてんだ、カタツムリと結婚するカメムシみたいに似合つてないぞ！」  
「アンタのせいでかつこつけられてないしカタツムリと結婚するカメムシって何よ!?」

と騒ぎ始める鈴だが…

「いつた!?何すんのよ！」

誰かに殴られ、後ろを振り向くと…

「げつ、千冬さん…」

「織斑先生と呼べ、邪魔だつさつさと戻る」

「今だつ――――――――!!」

「――で一夏が跳ぶ！その手には、カジキマグロが――！」

「くたばれサンドイツチ工房が――――――!!」

「ええ!? ちょっと！」

急に斬り（？）かかられる鈴、それに対し千冬は拳で殴ろうとするが…

「馬鹿め!! 来い！俺の相棒――」

((まさか…また舞妓・カルロス?))

それを予想したクラスの皆がブルブルと震え上がる。あの「汚物相撲事件」以来女子達は名を聞いただけで鳥肌が立つほどトラウマになっていた。

「堀堀マウンテン!」

「おーう!俺の出番だな一夏ちゃん!」

だが違う。現れたのはスコップを咥えて幼稚園児の服を着たナイスガイの男だった。

「死にさらせ織斑姉ーー!!」

「ふんっ!!」

しかし、千冬の拳によつてふつ飛ばされてしまう。それに鈴と一夏が巻き込まれる。

「なんで私までーーー??!!」

「俺の体は段ボール感触枕つーーーーー!!!」

3人仲良く窓から落とされた。

# CHINESE PIGのLUNCH TIME!

「いや～お久しぶ林檎蜂蜜ラーメンだな鈴」

「…こつちは思つてたのと違うけど」

列に並びながら、話をする二人。

「ねえ一夏、あんた病でも持つた？ 性格変わりすぎでしょ？」

「まあな、年が経てば人も変わる。『鬼のエアコンが持つワンドフルなジンベエザメ』と  
いうことわざもあるし」

「無いわよ！ 日本にも世界にも！」

鈴はラーメンを持ち、一夏も自分の注文した品を取る。

「……何それ？」

「何つて、『苺と美味しんぼ26巻の特製キュベレイ焼き』だけど？」

「ただの工場廃棄物よそれは！」

フルーツと漫画とガンプラがグツグツ煮込まれたその料理を見て鈴は絶句する。

「じゃ、そのカレーとトレードな」

「しないし私のはラーメンよ！」

「まさかつさと机につこうぜ、カレーラー鈴」

「混ざつてる！混ざつてる！」

そんな二人のやりとりを、セシリリアと篝が睨んでいた。

「…」

「まさか一夏がISを動かすなんて…」

「俺もびっくり桃の木チンパンジーだつた。俺も動かせる動かせないいうごメモゲロゲロ30分とは思つてイカとタコのハーモニーだつたよ」

「日本語で話しなさい！」

「まあまあこれでも食えよ」

「ありがと…むぐつ！」

瞬間、鈴の味覚に、プラスチックを溶かしたような粘りけ、苺の甘みと酸味、紙の舌  
触りが襲う！

「な、な、な、何よこれ————！」  
途端に鈴が苦しみ始める。

「い、一夏あ!! あんたあの廃棄物食わせたわね!!」

「いや、お前が頼んだラーメンだぞ」

「ラーメンなの!?」

今度は盛大にずつこける。

「堀堀マウンテンの奴、味付け逆にしたな…」

「あいつ!? またあいつなの!? ていうかあいつ食堂で働いてんの!?」

「そうだぞ、舞妓・カルロスだつてこの学園の杉の下で座つてるし」

「誰よそれは！」

その名に、後ろで聞いていた女子達が怯え始める。

「一夏! 誰なんだその女は!」

「ここで筈とセシリアが割り込む。

「おう、こいつは俺の幼なじみでな。よくテニスラケットで学校の校長先生の尻ひっぱたいていた仲だぞ」

「身に覚えが無いにも程があるわよ! というよりあの校長先生が痔で数週間休む事件あんたの仕業!?」

「いや、それは違うぞ」

「違うのかーーい!!」

まあその時の一夏はまだ正常であつた。今は見る影も無いが……

「まあ食えよ2人とも、このラーメンを」

(あつ！そのラーメンは…！)

先程鈴の舌をヘル・アンド・ヘブン状態にしたラーメン（ゴミ）であつた。「…そこまで言うなら一口…」

「私も頂きますわ」

「ダメツ―――  
！」

その時、2人の美女が、血が混じつた黄色い噴水を上げた。

# MOP & BANANAとのEXERCISE!

放課後、セシリ亞との自主練に箒が混ざる。

「篠ノ之さん、これはどういうことですの!?」

「訓練機の使用許可が下りたんだ。今日からこれで特訓に付き合う

「打鉄：日本の量産機：」

「打鉄：俺の玩具：」

「どうやら2人の価値観は盛大に違うらしい。

「言つておくが一夏、ISを操るのは禁止だからな」

「え何で」

「当たり前ですの！ そうじやなきや特訓になりませんわ！」

「まあ…それでも勝てるけどな」

「言つてくれますわね！ 全力で行かせてもらいますわ！」

「相手をしてやるよ、青雲」

「……」で一夏の性格がまた変わる。どうやら戦うときだけあのふざけた性格は治るら

しい。

「なんなら箒も混ざるか？」

「二対一：不本意だがこれで対等だろう」

箒も構える。一夏は2人を見比べて口角を曲げた。

「ま、暇つぶしにはいいか」

「操るのは禁止…なら！」

すると一夏はどこからか一枚のディスクを取り出す。

「何もISを操るだけが舞踏会の取り柄じゃない。こいつの真の強さは…その『手数』だ！」

そして腕についている装置に入れた。

「ジョーカー舞踏会！曲目スタイルチエンジ変更！」

すると一夏のISの容姿が劇的に変わる。

白と青の優しい色つき、それに対しても威厳ある獅子のようなたてがみを持ち、辺りにプラズマを散らしていた。

「聖雷！」  
ジンオウガ

「姿が…変わった!?!」

「はつ！」

一夏は電撃を強め、2人を蹴散らした。

「ぐあつ!?!」

「きやつ!?!」

そして一夏は辺りに小さな光球をまき散らす。

光球は上空に昇り、上を光に染める。

「今度は何をする気だ…！」

一夏は人差し指を立て、下に振り下ろした。

「雷様の…一瞥！」

すると光球の一つが雷のようにセシリ亞に落ちた。

「くつ…!?!」

大したダメージではないが、上空の全ての光球を全て受け止める程の耐久性は無い。

「もう一度！」

予想通り、光球がどんどん自分達目掛けて落ちてくる。

「はつ！」

そこでセシリ亞はブルー・ティアーズで向かつてきた光球を撃ち落としていく。

「これは…撃てるかな！」

一夏は五本指を全部立てて振り下ろす。

「雷様の憤怒！」  
ハレマタイカヅチ

すると全ての光球が雨のように降り注ぐ。

「そんな…きやつ！」

「うぐつ！？」

機関銃で撃たれまくるかの如く、2人は沢山の球を受け、地面に墜落する。

「この間戦った時と性能が違います…どうなっていますの？」

「言つたろ？手数が多いって」

一夏はプラズマを一層強めて両手を広げた。

「頑張れよお二人さん…俺の天気予報はまだ終わらねえぞ？」

# ELECTRICITYなONE SUMMER!

「私達も負けていられないぞ！」

「ええ！」

そう言つて篠は斬りかかり、セシリアはピットで一夏を狙撃するが…

「迅雷幻速！」

電気を纏つた一夏は、まるで神速の如くアリーナを駆け巡り、二人の攻撃を避けた。

「なつ!? 何で速さ！」

「雷神の跳躍！」

そして超スピードで篠に攻撃し続ける。目には見えないので、一人で篠が苦しんでいるように見える。

「篠ノ之さん！」

「くつ…！」

「雷落とし!!」

そして強力な跳躍として篠は地面に激突する。ここで篠のエネルギーがゼロになり、リタイアした。

「ま、まさかここまで強いとは…！」

(強い…あの形態は凄まじい速さで一瞬にして勝負を付けられる…なら…)

(こ)でセシリアはピットを自分の周囲に集め、全方位にビームが撃てるようとした。

「俺の攻撃をカウンターするつもりだな…面白い、乗つてやる！」

一夏は超スピードでセシリアの周りを飛び始める。ピットはそれを狙つて撃つが、避けられてしまう。

「何を考えていますの…？」

「すぐ分かるさ」

するとどうしたことか、急に風が強くなる。

「まさか…竜巻を!?」

一夏の猛回転により、セシリアは風の壁に囲まれてしまう。

「これぞ…ワルツ・ステージ雷雲の踊り場!!」

竜巻の中にいるため、セシリアは一夏の居場所を見失つた。

(この竜巻を突破できないのは一夏さんも同じ筈…だから私に攻撃をする方向は…)

セシリアは全てのピットを上空に向け、その先にいる一夏を狙い定めた！

「bingo! だけど、それを突かれるのは俺も予想していたぜ！」

「bingo! だけど、それを突かれるのは俺も予想していたぜ！」

「なっ!?」

すると竜巻を突き破つて、電気の光球が全方位から放たれる。

「しまった！ブルー・ティアーズを一点に集中しすぎ——。」

結果セシリ亞は攻撃を受け、シールドエネルギーがゼロになつた。

「お疲れさん～結構頑張つてたんじやね？」

一夏が拍手をしながら降りてくる。

「ご冗談を：ボロ負けでしたわ」

「ああ：完敗だよ」

「今日はどうも蟻が $5 \times 2$ な！またトウモロートウモロコシ！」

そしていつの間にか性格が戻つている。それに二人は溜息を吐いた。

一夏が更衣室に入ると、携帯電話で通話をする。

「あ、もしもし、束さん？」

『おお～！ いつもお疲れ～！見てたよ！』

相手は筍の姉である「筍ノ之束」であつた。

「束さん、今の戦闘データで『例の物』作れます？」

『もう完成したよ！』

「マジかマスカット」

一夏はデイスク入れを漁り、見たことも無いデイスクを一枚取り出した。  
それにはこう書かれている。  
『新世界の蒼い雪』<sup>ネオブルーディスク</sup>と…

C H I N E S E   P I G

V S N E W

M E M B E R !

「おつかれ、一夏！」

「あ、フランクフルト将軍」

「何よフランクフルト将軍つて!?」

のつけからからわれる鈴。

「たく…飲み物はスパドリでいいわよね?」

「いいけど…そのスパドリじやねーぞ?」

「え、他の奴が良かつた?」

「スパドリはスパドリでもスペース・ドリアーノの方が…」

「聞いた事無いわよそんな飲み物!」

「お前も飲むか?」

そう言って一夏は紫色の粉末を取り出す。

「液体ですらないの!?」

「お前…ずっと待つてくれたのか?」

「まあね…」

ペットボトルを持つてもじもじする鈴。

「…やつと二人きりになつたね」

「イヤ、ワタシタチモ」

「いるんだよね♪♪」

「ここ」でロツカーの中から逆さ状態で舞妓・カルロスと堀堀マウンテンが現れる。

「あんた達!?何してんのよ!?!」

「イチカサンニホウコクスルコトガアルンデスヨ」

「報告すること?」

「ああ、俺つち達『部費私的使用戦隊 カンガルー』に新メンバーが追加された!」

「部費私的使用戦隊!?!」

「ほほお…じやあ面接をしてやる。ここへ呼べ」

「何アンタも普通に接しているのよ!」

「フタリトモ、メンセツカンオネガイシマス」

「二人とも!?私も!?私も巻き込まれるの!」

「では紹介するぜ!海を総べ、陸地の生き物を皆ぼた餅にする悪魔の男…」

そいつが姿を現した。

「シユールストレミング・海鼠だ！」

「…」シユコ一 シユコ一

「きやあああああああああああああああああああああああああああああ!!!!」

紹介された男、シユールストレミング・海鼠は酷い格好をしていた。

黄ばんだブリーフと水中マスク。そしてブリーフからは桃色の触手がわんさか溢れ  
ている。

そして今まで嗅いだことの無い異臭を醸し出しながら無言で盆踊りを続ける。

「な、何よその変態！」

「じゃあ面接を始める」

「…」シユコ一 シユコ一

「えへ好きなアルプス山脈は?」

「…」シユコ一 シユコ一

「ここはペンですか？それともスースル国ですか？」

「…」シユコ一 シユコ一

「メケメケ!!メケメケメケ?」

「…」シユコ一 シユコ一

「…よし！合格だ！」

「今まで!? 何処を見てそう判断したのよ!」

「乳房の大きさ』

「無いわよそんなの!」

「ようこそシユールストレミング・海鼠君! 歓迎するよ!」

「⋮」シユコ一 シユコ一

こうして、一夏に新たな仲間が加わった。

おまけ

『部費私的使用戦隊 カンガルーの歌』

作詞 ZUNEZUNE

跳べ! 謝れ! 逃げろ! クズの集団♪♪

欲しいゲームがあるのなら 使つてしまえ部費使用!

舞妓の服で相手をメロメロ 舞妓・カルロス! (元男性!)

自慢のスコップでの子の穴を掘る 堀堀マウンテン! (自主規制!)

匂いで相手を潰す シユールストレミング・海鼠! (職質嵐!)

三つの変態 揃う時♪♪奴が来る♪♪

我らが織斑 一夏♪♪

戦え！邪魔しろ！暴れろ！カンガル♪

## MOP vs CHINESE PIG

「どういわけだから…部屋変わつて？」

と、鈴が1025室に来て筈に聞いた。

「どういわけだ！前の話では私と一夏の同室の話すら出てこなかつたぞ！」

「そりやあれよ、書かれなかつただけよ」

「ふざけるな！何故私が！」

「いやあゝ篠ノ之さんも男と同室なんて嫌でしょ？」

「別に嫌とは言つてないが…逆に貴様はこの部屋が嫌では無いのか？」

ちなみにこの部屋は色々とパワーアップしている。

ベットの下には大量の魔導書、鏡には赤い絵の具（消えない）で「ピーマン・ピーウームン」と書かれており、シャワー室には足が付いたコンニャクの模型が100以上飾られている。

「……………別に構わないわ」

「嘘をつけ！今日線が泳いでいたぞ！私自身も嫌がつてているというのに」

「だつたらこの部屋出て行けば良いじゃない」

「ぐつ…それは…」

「ここで箒は、後ろでダンベルを両手に持ちながらラジオ体操している一夏を一瞥する。

「兎に角！その提案は断る！これは私と一夏の問題だ！」

「それなら私も幼なじみよ、ねー♪」

「ねー♪」

「貴様も反応するな！」

箒の怒りがMAXに到達する。

「ところで一夏、あの約束覚えてる？」

「P R O M I S E？」

「……そう！小学校の」

「ああ、一緒に鉄棒の上で押し相撲しようつて約束か」

「違うわよ！そんな約束してないわよ！」

「無視するな！こうなつたら！」

箒の怒りが爆発し、手元にあつた竹刀を持つと…

『よくぞ我を抜いた…』

「?!」

竹刀からやけに低い声が響いた。

『我を抜いた者よ…何を望む?』

「な、何だこれは!?!」

「ああ、お前の竹刀なんかつまらなかつたから音声機能埋め込んだぞ」

「このお!!」

『何を望む…』

「…これ、どうやつたら止まるの?」

「願いを言えば止まるぞ」

「そう…だつたら私と一夏を…」

「待て!今貴様何を言おうとした!」

「良いじやない!あんたは黙つていなさい!」

「何を!!」

二人が竹刀のことを忘れて喧嘩を始める。

『何を望む…』

「布団に入りながらバーベ球技大会がしたいな」

「あつ!!」

『布団に入りながらバーベ球技大会…良いだろう』

「嘘！これ本当に願い叶えてくれるの!?」

「まずバーベ球技大会つて何だ!!」

「ここで竹刀が携帯のように振動し始め…

『だつたらお望み通り焼いてやるよお!!死ねリア充!!』

『3秒後に爆発します』

「「えつ——」」

「こうして、一夏と筈と（何故か）鈴は廊下で寝るはめになつたとさ。

「貴方は犬の小便博士!!貴方がたこ焼き豪雨を止めてくださるんですね！」

（（寝言がうるさくて寝られない：：）

# ONE SUMMER vs CHINESE PIG

クラス対抗戦の日、アリーナの観客席は女子生徒で溢れている。

「初戦からあの中中国の……！」

鈴と一夏は初戦からバッタリ当たつた。

『あちらのISは「甲龍」、近接格闘型です』

「私の時は勝手が違いましてよ、油断は禁物ですわ」

「硬くなるな、練習の時と同じようにやれば勝てる」

「ああ、任しとけ」

もう一夏のスイッチは入つており、真面目な性格になつていた。

『織斑、あのISを操る機能の使用は禁止だ。パワーバランスが崩れる』

「わかつてますよ……あ、そうだセシリア』

「何ですか？」

「先にお前とイギリスに謝つておくわ。めんこ」

「えつ——？」

そして、一夏が出陣する！

「聞いたわよ一夏！あんたＩＳ操れるのが取り柄だつたのに禁止されたんだつてね！」

「ああ、それがどうした？」

鈴が挑発をしてくる。

「それで勝てるの？今謝るなら少し痛めつけるレベルを下げて上げるわよ」

「俺なんか悪い事したか？」

「したわよ！千冬さんの巻き添えを喰らうわ変態に会わせるわ爆発に巻き込ませるわ

！」

「まあ気にすんなよ…余計胸が小さくなるぜ？」

「…一分かつた…もう許さないんだから!!」

鈴が刀で斬りかかるが、一夏はそれを素早く避ける。

そして、ディスク一枚取り出した。

「テストにや丁度良い：見せてやる！俺の新しい力を！」

ディスクを装置に入れ。

「舞踏会！曲目変更！」

またＩＳの姿が変わる。しかしこの前の姿ではない。

「なつ…あれは…！」

ジヨーカー  
「舞踏会の新しい姿を見てセシリアは驚く。何故ならあの姿は…」

「新世界の蒼い雲!!」  
ネオブルー・ティアーズ

セシリアの専用機、ブルー・ティアーズに瓜二つだからだ。

ピットの数は8本、蒼いボディには黒いラインが入っており、レーザーライフルも銃口が三つあつた。

「何その姿…こないだの奴とは違すぎる！」

観客達も一夏の変わりように驚愕している。

「はっ！」

8本のうち6本のピットがレーザーを撃つ。鈴はそれを躊躇続けるが、ピットレー

ザーは雨のように撃たれている。

「調子に…乗るんじやないわよ！」

「これは…!?」

「これが私の『龍砲』よ！思ひ知つたか！」

「これも全部…紜汰さんのせいだ…」

「違うわよ！てか誰よ！」

「スター・ライト・ムック FINAL 鈴は龍砲を撃ちまくつて一夏を追い詰める。しかし…  
星光りの想い!!」

三つの銃口からレーザーが撃たれ、甲龍の肩に当たる。

「くつ…鬱陶しい！」

「さあ！俺織斑一夏と舞踏会の奏でる不協和音で苦しめ！」

# 現れたIRREGULAR！

「喰らえ！」

「あんたがねつ！」

一夏と鈴の撃ち合いはかれこれ數十分続いている。

ここで言つておこう。一夏は鈴をすぐに倒せる。

鈴の射撃が当たらないほどの速さ：つまり聖雷ジンオウガを使えば一瞬で間合いを詰めて一撃當てられる。しかし一夏はそれをしなかつた。

楽しんでいるのだ。ある程度の距離を作つてでの撃ち合いが。新しい力の性能を試したくてウズウズしている。

「行くぞ鈴!!」

「私だつて……」

しかし、二人の戦闘を1本のビームが遮る。

「!?」

アリーナの遮断シールドを破つて爆風を上げた。

「システム破損、何かがアリーナの遮断シールドを貫通してきました！」

「試合中止！織斑、凰！直ちに退避しろ！」

「（）で防衛のため観客席の屋根が全て閉められる。

「何だあ…？」

「一夏！試合は中止よ！今すぐピットに戻つて！」

「（）で画面に情報が映し出される。

「所属不明の I S…？」

「一夏！早くピットに――！」

爆炎の中から発射されたビームに当たりそうになる鈴だが、一夏が鈴を持ち上げて避ける。

「ちよつと馬鹿！放しなさいよ！」

「（）でビーム兵器を撃つてきた者の姿が目に入った。全体的にゴツい I S、一切操縦者の皮膚が見えないことから全身装甲<sup>フルスキン</sup>であろう。

「I S…なら！」

「（）で一夏は紫色の波動を発するが、正体不明機に焼き消されてしまう。

(ハッキング防止システム…いや、防止どころか…)

「…ここでエラー画面が幾つも表示されるが…」

(俺を操ろうなんざ…五万年早え!)

「夏のタイプングによつてすぐに消された。」

(俺がハッキングしようとした時の経路で逆に乗つ取ろうとしてきたか…！そしてアリーナも!)

「先生！遮断シールドが強制的にレベル4、そして扉が全てロック状態に！」

「あのＩＳの仕業か…」

「どうしたのよ!? 一夏！」

「鈴、あいつは気をつけた方が良い。俺のハッキングコントロールが効かなかつた」「はあ!?」

「それどころかアリーナのシステムを奪われちまつてる…どうやら俺達も含め生徒をここから出さないつもりらしい…！」

「ここから? …なら」

「先生や先輩方が何とかするまでこいつを足止め…だろ?」

「いや……こいつを倒すわよ！」

「了解……楽勝だぜ！」

（こ）で一夏は聖雷ジンオウガとなる。

「俺が高速の接近戦をするから、お前は遠くからの射撃援護を頼む。俺ごと撃つつもりで構わない！」

「……本当にするわよ」

「（ご）自由に！」

ビームを躊躇しながら話し合う2人。もう2人の標的は正体不明機になつていた。

「行くぞ！ 鈴！」

「任しどきなさい！ 一夏！」

# UNKNOWN　ISの正体！

「おら!!」

一夏の目にも留まらぬスピードで、正体不明機を追撃する。

1カ所を攻撃したら先回りして他の場所を攻撃。それをずっと続けていた。

しかし時々長い腕が一夏を追い詰めようとしているので、それ鈴が射撃で妨害した。

ここで正体不明機が鈴に向かってビームを撃とうとするが…

「させるか馬鹿!!」

一夏が回し蹴りで正体不明機の向きを変えて、ビームをわざと外させる。

ここで正体不明機は一夏から離れる。

回り込んで逃がさないようにするつもりだつたが、ビームを乱射しながら回転し始めた。

「うおっ!!」

「きやつ!!」

あまりの弾幕に、攻撃する時も近寄る暇さえ当たらない。ひたすらビームを避け続け

るしかなかつた。

(こんな弾幕の中で超スピードの動きしたら当たつちまうな…ならば!)

一夏は沢山の光球を出し、自分の前に壁を作つた。

「特攻あるのみ!」

こうして防壁を張り無理に突破して正体不明機の目前まで到達する。

「少し…落ち着けよ!」

(あんたが言うか!)

ここで一夏は猛回転している正体不明機を両手で掴む。自分も回転しながらも両足を地面につけてブレーキをかけ、スピンを止めた。

「鈴! 今だ!」

「OK!」

一夏が動きを封じていて、鈴が龍砲を叩き込む。

数発受けた正体不明機は一夏を持ち上げ、鈴の方へと投げ飛ばした。

「嘘つ!？」

投げ飛ばされた一夏は鈴に激突する。

「気をつけなさいよ!」

「…」

「ちょっと聞いてんの!?」

急に一夏が黙り込む。

「おい鈴…あいつ何か変じやね?」

「あんたが変なんて言つたら全部変だけど…どこが?」

「何つーか：機械っぽいつか…」

「そりや機械だから当たり前じやない」

「そうじやなくて…人が動かしてないような気が…」

「何よそれ、人が動かす以外に誰が動かしてんのよ」

「…無人機とか?」

「はあ? そんなのありえ——」

「ここで鈴が急に変なポーズを決める。というより体が勝手に動いた。

「何これ? 一体どうなつて…」

横を向くと一夏が指で自分の I Sを操つてゐる。

「何やつてんのよ一夏! 人の I S操つてんじや…」

「今やつてゐる甲龍の操作は、お前じやなくて俺だぞ」

「…何が言いたいのよ」

ここで甲龍の操作が鈴に解放される。  
（シヨンロン）

「あのＩＳもどつから操つてんじやね？それか人工知能か…」

「あつ！」

「証拠に、俺達が今喋つている時に攻撃してこないだろ？多分ある程度離れていると反応してこないんだよ」

「そつかあ…でも仮に無人機ならどうするのよ」

「無人機なら…楽勝だぜ」

ONE SUMMER & CHINESE PIG vs UNKNOWN!

「楽勝つて…あんた何する気?」

「まあ見てなつて…!!」

すると一夏が無人機の懷に潜り込み、重い拳を腹に入れた。

「なつ!?

その威力は先程とは大違い、殴られた箇所が深く陥没している。ぱちぱちと音を鳴らし、無人機が震え始める。

「もういつちょ!」

今度は回し蹴りで右肩を破損させる。その次は腕払いでの右足を、左足を、左肩を、右

腕を、左腕を、

「雷雲の嵐!!

た。一夏による圧倒的な打撃の連続、一つ一つが無人機をへこまし、削り、ボロボロにし

攻撃を受ける度に無人機の動きを鈍くなる。それもその筈、一夏は攻撃を当てた時、大量の電圧を無人機の内部に流し込んでいるからだ。

その電圧量は想像を絶する程であり、それが無人機を中から壊していく。

この技は、無人機相手にできる物であった。

これを人間が乗つていてI Sを使うと、凄まじい電圧で殺してしまってからだ。

「雷雲の踊り場!!」  
〔ワルツ・スティージ〕

ここで一夏は無人機を投げ飛ばして竜巻を起こし、無人機を竜巻で周回させる。

竜巻の中にはナイフの形をした電圧が散らばつており、無人機が回転する度にその体を削る。ミキサー状態だった。

「凄い…」

その光景に鈴は動けずにいた。ここまで力があつたとは思つていなかつたからだ。

「鈴！お前の龍砲！俺に撃ちまくつてくれ!!」

「あ!?あんた何言つて!?」

「いいから！早く撃て！」

「無理に決まつてんじやない！そんなことできるわけ——！」

鈴は気付いた。もう自分は一夏の手駒になつていることを。龍砲の標的が、勝手に一夏になる。

「……ああもうわかつたわよ！やるから操るのは止めなさい！」

そう言うと一夏のコントロールは無くなり、鈴は自分の意思で龍砲を撃つた。  
（瞬時<sup>イグニッシュン</sup>・ブースト 加速<sup>・</sup>と同じ感じで：龍砲のエネルギーを吸收<sup>・</sup>そして！）

鈴は一夏に龍砲を撃ちまくる。するとどうしたことか。一夏の右手が凄まじい稻妻<sup>・</sup>を纏う。

（電力に変える!!）

一夏が作つたのは自分より数倍大きい電気の剣。無人機を圧倒的に上回る程のサイズだつた。

「これでトドメだあ!!」

電気の大剣を構え、無人機へと一直線に飛ぶ。無人機はもう正常じや無いのか、避けようとも逃げようともしない。

「——龍牙雷斬！  
エレキギロチン

無人機が、無人機の体が、真つ二つに切断される。

それを見ていた者は皆驚いていた。  
そして…爆発した。

「はっは…これで終わり尾張お寿司だぜ」  
最後に一夏の性格が戻っていた。

# BATTLE AFTER!

「凄い……一刀両断にした……」

一夏のトドメを見て鈴は驚嘆する。

あんな大きなISを真っ二つにしたからだ。

「あんなに強くなつたんだ……一夏のやつ」

「ふうー」

ISを解除して準備室に戻る一夏と鈴。

「あんた、中々強くなつたじやない。見直したわよ」

「それはサンキューベリーストロベリーべラミー」

いつのまにか性格が戻つていた。

「はあ……その性格がどうにかなれば……」

「一夏（さん）!!」

ここで筈とセシリ亞が駆けつけた。

「おーう、育児簿とセシリアントワネット」

「変なあだ名をつけるな！」

「まつたくですわ！」

「メンゴメンコマンゴーアームズ！」

一夏は鮓鉾のように反り謝罪する。

「……変わつてないようで安心しましたわ」

「それについても見事だつたぞ！あの両断は！」

「ソウデシタヨイチカサン」

「お見事！流石我らがボス！」

「⋮」

するといつのまにか部費私的利用戦隊カンガルーの3人組がいた。

「うわ！アンタらまた！」

「しかも増えてますの！」

「一夏！結局こいつらは何なんだ！」

「部費私的利用戦隊カンガルーだけど？」

「ええい！何だそれは！」

「何だそれはつて言われてもなあ⋮」

「イインデスヨイチカサン」

「どうせ俺たち理解なんかされねえよ」

「…」

「…………そ、うだよな」

一夏と戦隊達が俯いて落ち込み始めた。

(何だこの空氣…)

(いい？間違つても何聞くんじやないわよ！メンドくさくなるから！…)

(わかっている)

そう箒と鈴がアイコンタクトするが…

「その落ち込みよう…過去に何かありましたの？」

((セシリアの馬鹿ーーー!!))

セシリアが聞いてしまった。

「そうだな…あれは数年前のことだ…」

「回想に入るじやないわよーー!!」

あの時の舞妓・カルロス達は荒れていた…

「ヒヤツハ——!! チョコエツグでコンビニに募金してやるぜ——!!」  
「ブツコロシテヤラアア——!!」

そして、二人が国會議事堂でレツツ全裸体操しようとした時：

「やめるんだお前たち！」

「ナンダオマエ！」

「俺は一夏：世界一はつちやけてる男だ」

「何よお!? 世界一はつちやけてるのは俺たちだ！」

「ヤツチマエ——!!」

「こうなつたら……実力行使だあ——！」

そうすると一夏は二人の首根っこを掴み、投げ飛ばした。

「ぐわつ——!!」

「世界はこんなに痛がつてるのに、お前たちは何も痛みを感じていない！」

そして血だらけの二人にバズーカを向ける。

「少しは痛みを知れ————!!」

「ぎやああああああ——!!」

「ということなんだ」

「…………えつ？」

「えつ？」

「それで……何でこんなに落ち込んでいるんですの？」

「そうだな……あれは数年前のことだ…」

「「えつ」」

この回想無限ループは26回続いたとさ。

# MOPのCHANGE ROOM!

「お前以外全員女子かー言い思ひしてんだろうなあー」

「ああーしてるヨンダブル4D」

「一夏は学園外、五反田家で親友の弾と格闘ゲームをしていた。  
『マジで!? どんな子と!?』

「英國娘と幼なじみと鈴々とその他で遊んでるかなー」

「…お前の場合の『遊んでる』は『弄つている』つて意味なんだろうな」 ハア

『K・O!』

「ここで一夏のキヤラが敗北する。

「ありや？ また負けた。これで20連敗だぜ」

「だろうな！ お前が使つてんのがWi-Fiハンドルだからだよ！」

「え？ 格闘キヤラを車扱いの如く動かすゲームじやないのか？」

「そんなブラックなゲームじやねーからこれ！」

「まあいいや、マリカーやろうぜ」スツ

「そのリモコン今の格闘ゲームで使うんだよ！」

「ここで部屋の扉が勢い良く蹴り開けられる。

「お兄、お昼できたよ、つて一夏さん!?」

「弾の妹である蘭である。家中だからか少々だらしない着方をしていた。

「おう蘭、お久しぶりリンカーン」

「何してるんですか!?」

「今からだんだんとリアルグラセフしようかなと思つてな」

「どこのバイ菌のロボットだ俺は！そしてやらねえよそんな物騒なこと！」

「き、来てたんですか？！」

「家人面大根収穫のついでにな」

「お前いい加減あれどうにかしろよ、おかげでお前ん家幽霊屋敷なんて噂されてんぞ」

「ああ、だからこの前千冬姉白目剥きながら俺のことボコスカアタツクしたのか」

「お兄！何で言わなかつたのよ!?」コソコソ

「仕方ねえだろ！こいついきなり窓から現れたんだぜ!?」コソコソ

「お引っ越しです」

「はい？」

その日の晩、山田が部屋に入ってきてそう言う。

「どうしたんですか先生、ついに黒猫野郎の手先になりましたか？」  
「違います！…ていうか何してんですか？」

山田の目の前には、丸太を持つてホッケーマスクをした男を筈が取り押さえていた。

「一夏のことは気にせず：それはどういう意味ですか？」

「部屋の調整がついたんです、篠ノ之さんは別の部屋に移動です」

「ま、待つて下さい！それは今すぐでないといけませんか！」

「それはまあそうです。何時までも年頃の男女が同室で生活するというのは、篠ノ之さんもくつろげないでしよう？」

「じゃあ俺が女装すれば…」ゴソガソ

「しなくてもいい（です）!!」

スカートを着用する一夏を止める2人。

「ていうより俺も一人の方がいいな。この部屋もつとグチャグチャにできるし…」

「それは本当に止めていただきたいのですが…」

山田が溜息を吐く。

逆に一人の方がいいと言われた筈は怒った。

「先生！今すぐ部屋を移動します！」  
「は…はい」

そう言つて筈は部屋を出ようとすると、

「待て筈！今お前に出られると困る！」

急に一夏が呼び止めた。これには筈も驚く。

(まさか一夏：そんなに私と同室：いや同棲がいいのか!?)

「お前がいないと、いつものオチができない」

「はつ——？」

振り返ると、一夏はスイッチを手にしており、それを躊躇無く押した。

『3秒後に爆発します』

「「えつ——？」」

こうして、一夏は一人になつたとさ。

「犬の小便博士——!!だからワサビにボールペンは無理だと——!!」

寝言を聞く人もいない。

# EXCHANGE STUDENT 現る！

「ねえ知ってる？今日転校生来るんだって」「えっそうなの！？」

教室は新たなクラスメートの話で盛り上がりがつっていた。

「だつて先生が職員室前で話していたんだもん！」

「転校生…ですの？」

「ああ、そんなことより一夏知らないか？」

「同じ部屋だから今まで一緒に登校したのでは？」

「それが昨日移動になつて…」

「席に着け、ホームルームを始める」

「ここで千冬が入つてくる。

クラスの皆が着席した。

山田が教壇に立つ。

「今日は何と、転校生を紹介します」

クラスの扉が開き、転校生が入ってきた。

金髪でズボンをはいている。

「シャルル・デュノアです。フランスから来ました。皆さん、宜しくお願ひします」  
「お、男?」

「はい、こちらに僕と同じ境遇のいると聞いて本国から転入を——」  
「キヤツ———!!」

「男子!二人目の男子!」

「しかもうちのクラス!」

「守つてあげたくなる系の!」

「騒ぐな、静かにしろ!」

千冬の言葉により、クラスがシンとなる。

「あのところで……織斑一夏君は?」

「あいつは……いつも通りだ」ハア

「えつ?」

するとその時……

「ゴーヤ———!!!!」

「!!!!!!」

一夏が扉を蹴り破った。

これにはシャルもクラスの人も驚く。

一夏は動物を持つていた。

「見てくれよこのヘラジカ！高速道路では時速500kgは出せるんだぜ！」  
と、一夏は自分のイグアナを見せて自慢する。

「こいつみたいな早く熱い心を俺も作る前戦……………！」

そして懐から縄跳びの紐を取りだし、自分の顔をひたすら叩く。

「これでもか！これでもカモノハシを昆虫と認めんのか！」パシッ!!パシッ!!

「えっ!?ちよつ!?えつ!?」

「LET, S おやつマシ————ン!!!」

そう言つて窓を突き破つて降りる。

「えつ—————!!?」

初体験のシャルルには何が何だか分からぬ。

「あの：先生？あれは：？」

「安心しろ、あれで普通だ」

「あれで!?」

「…少し待つてろ、捕まえてくる」

そう言つて千冬はクラスから出る。

一夏は下でひたすらミニズのように呻いていた。  
そこに、千冬の跳び膝蹴りが来た。

「織斑、転校生のシャルル・デュノアだ」

「どーも、織斑一夏です」

そして血まみれの状態で連れてこられる。

「同じ男子だ、お前が面倒見てくれ」

「よーし俺が立派な炬燵廃人してくれようぞ」 クツクツク

「やめんかつ!!」

「ぐはっーー!?

そうしてまた一夏が殴られる。

シャルルはその光景を見て開いた口がふさがらない。

# ONE SUMMER & CONCUBINE, CHIL D!

「今日は2組との合同でIS実習を行う。各人はすぐ着替えて第二グラウンドへ集合だ」

「き、君が織斑君?」

シャルルは奇怪な行動を繰り返す一夏に若干恐れながらも接する。

「これからよろ——」

「ああ、良いからイカシオ。とにかく移動が先よん」

一夏はシャルルの手を繋ぐ。彼はそれにぎよつとした。

「女子が脱ぎ始めるからな」

そのままクラスを出る。女子達はそれを微笑んで見ていた。

「WEはアリーナの更衣室で着替えるん大根人参! 実習の度これだから早めに慣れろよメロン! —

「はあ……」

「あつ! 噂の転校生発見!」

すると目先の女子が騒ぎ始める。

「しかも基地外で有名な織斑と一緒に！」

「おいおい、そんなに褒めるなよ」

「褒めてないよ…多分」

「いた！こつちよ！」

「者どもあえあえ！」

「見て見て！二人とも手繋いでる！」

「織斑君の黒髪も良いけど、金髪も良いよね！」

「おやおや…通せんばかね？」

「どうする？これじゃあ授業に間に合わないよ？」

「安心しろ、助つ人を呼んでいる」

「助つ人？」

すると外からヘリの音が聞こえてくる。

そして天井から大きい何かが突き破つて現れた。

「丁度来たな…シャルルンバ、紹介するぜ。俺の友人の…」

「宇宙横綱 RKSだ！」

「ちゃんこ鍋、ちゃんこ鍋！」

そこには宇宙服の上部分だけ来た横綱がドンと構えている。

これにはシャルルや女子達も驚愕。

「きやつーー！相撲取りよ！」

「汚らわしい！汚らわしい！」

「RKS！道を作ってくれないか？」

「ちゃんこ鍋！ちゃんこ鍋！」

するとRKSは張り手でどんどん前方の女子達を吹き飛ばしていく。

「ちょっと！あれ大丈夫なの!?」

「ジョブジョブしゃぶしゃぶ！少し背骨がポツキーキュウリの如く『ボキイ!!』になるぐ  
らいだ！」

「大丈夫じゃないよそれ！」

「ちゃんこ鍋！ちゃんこ鍋！」 フンスフンス

「おっ！道をクリエイトしたらしいな！サンクスサーティーワンだぜ！」

「ちゃんこ鍋！ちゃんこ鍋！」ドヤドヤ

「じゃあ先にグラウンド行つて千冬姉を倒しに行つてこい！」

「ちゃんこ鍋！ちゃんこ鍋！」ドドドドド!!!

「ええ!? 何で!?

「織斑にデュノア…遅すぎる」

グラウンドでは他の生徒が2人を持っていた。そこに…

「ちゃんこ鍋！ちゃんこ鍋！」ドドドドド!!!

「「!?」」

RKSが千冬に襲いかかつてくる。

「ちゃんこ鍋ええええええええええ!!!!」

しかし…

「ふんぬつ!!!」

千冬の渾身の蹴りによつて高く蹴り飛ばされてしまう。その先には更衣室があつた。

「これ着るときに俺の馬並みのファンタスティック棒に引っかかつて気辛いなんだよ

な」

「えつ」///

一夏の急な下ネタに赤面するシャルル。そんな所に：

「ぐへぼつ!?」

「織斑君!?!」

飛んできたRKSが部屋の壁をぶち抜いて一夏に激突した。

# ONE SUMMERが受けるLESSON!

「本日から実習を開始する。まずは戦闘を実演して貰おう…鳳！オルコット！」

「はいっ！」

「専用気持ちなら直ぐ始められるだろう、前に出ろ！」

そう言われると2人は渋々前に出る。

「面倒くさいわね～」ハア

「なんかこういうのは見世物のようで気が進みませんわね…」

「お前ら少しはやる気を出せ…あいつにいいところを見せられるぞ」

「!!」

次の瞬間、目を輝かせる。

「やはりここはイギリス代表候補生、セシリヤ・オルコットの出番ですわね！」

「実力の違いを見せる良い機会よね、専用機持ちの！」

「今先生なんて言つたの？」ボソボソ

「俺が知るか」ボソボソ

ちなみに一夏の性格も真面になつてゐる。

「それでお相手は？鈴さんとの勝負でも構いませんが」

「こつちの台詞へ返り討ちよ」

「慌てるな馬鹿共、対戦相手は…」

すると何かが落ちる音と女性の悲鳴が聞こえる。

「きあやああああああああああああああど、どいてくださいあああああああああああああああい！！

ISに乗った山田が一夏の所へ墜落しそうになるか…

「えつ…あつはい！」

即座に舞踏会ジョーカーを起動した一夏にお姫様だつこされて無事だつた。

「もう…山田先生つたら…」ヒソヒソ

「意外と策士家なのね！」ヒソヒソ

専用機持ちの2人が小さな声で会話をしている。

「何をしている。お前らの相手は山田先生だ」

えつ？一対一ですか？」

「どうだか？」

「いやいやそれはさすがに……」

「安心しろ……一瞬で終わる」

文字通りの瞬殺であった。どっかとかとセシリ亞と鈴の連携の無さも原因だが。「これで諸君にも教員の実力が理解できただろう。以後は敬意を持つて接するよう！」

「「はーい」」

「へいへい山田！お疲れお通夜秋刀魚の蒸し焼きフイ――バ――――!!!!」パシツ!!パシツ!!

「貴様は敬意という言葉を調べてこい!!」ドゴオ!!

「ザザングロズツ!?」

「次に、グループになつて実習を始める。リーダーは専用機持ちがやること。では分かれろ！」

「オルコットさん教えて！」

「凰さんここ分からない！」

「デュノア君の操縦技術も見たいなー！」

他の専用機持ちに集まるのに、一夏はまつたくの孤独。

「何故だ…何故俺には来ないんダックスフンコロガシ…」  
（（何か感染しそう…））

「集まつてこないと舞妓・カルロスとまた隠し芸するぞ」ボソ  
「「是非」ご指導お願ひします！」

その時、量産機の女子生徒どころかセシリリアと筈まで集まつた。

# SECOND EXCHANGE STUDENT 現る!

「えつとお…今日も嬉しいお知らせがあります」

真耶はぎこちない表情で朝のホームルームを仕切る。

その横に居るのは銀髪の眼帯を身につけた小柄な女性生徒だ。  
「また一人、クラスにお友達が増えました。ドイツから転校してきた『ラウラ・ボーデ  
ヴィッヒ』さんです」

「どういうこと?」

「二日連続で転校生なんて」

「いくらなんでもおかしくない?」

「み、皆さんお静かに!まだ自己紹介が終わっていませんから」

「挨拶をしろ、ラウラ」

「はい、教官」

((教官?))

普段生徒を名字で呼ぶ千冬が名前で呼び、転校生が千冬を「教官」と呼ぶことを不思議に思うクラス。

「ラウラ・ボーデヴィイツヒだ」

「…あ、あのぉ…以上ですか？」

「以上だ！」

「…」でラウラは一夏を目で捉える。

「貴様が…！」

そうして一夏に近づき…

「ふん！」パシッ!!

その頬にビンタを喰らわせた。

「「!?!?」」

クラス中が驚く。いきなり引っぱたいたラウラ…ではなく、

「ひいっ！」

殴られた勢いで首が180°回転した一夏に。

これにはラウラも小さな悲鳴をあげる。

「けけけけケンタウロスコンビニダイヤモンドルビーろくろ首アンティーケギアマツ  
シユルーム!!!」テケテケ

「ひいいい!!??」

そして四肢を逆の方向に曲げ、仰向けになりながらの四足歩行でラウラの周りをゴキブリのように周回した。

「な、何なんだこいつは!?」

「一夏：遂に人間をやめてしまったか!?」

千冬も驚嘆している。

「皆よく見て！これロボットだよ！」

「「えつ!?」」

言われてみればやけにネジが露出している。というより何で気付けなかつたんだろ  
う。

ロボ一夏の口からFAXのよう<sup>に</sup>紙を吐き出す。

それにはこう書かれている。

『皆へ、俺は今日カンガルーの皆と太平洋分度器乱獲復興祭りに出るので学校は休みます。

追伸、ちゃんとオチがつくよう自爆機能もついてるよ♪』

「「じ、自爆!?」」

その文字を見て皆が一斉に距離を取る。

ロボ一夏は立ち上がり……箒を抱えた。

「えつ？…はつ…」

ここで箒、今までの経験がこれから起きる事を察する。

「や、やめろ！もう私は爆発に巻き込まれたくない！やめろ！」

ロボ一夏はまつたく耳を傾けずに、一夏の寮へと猛スピードで走り出した。

「嫌――!!もう爆発は嫌――!!」

そんな彼女の声も空しく遠ざかっていき…

数分後には、寮の方から爆音が響いた。

「何だと言うのだ…」

「ラウラ、この程度耐えないと一夏に勝てんぞ」

「?」

この時ラウラは、自分はとんでもない奴を恨んでいるのかも知れない…と思つた。

# ONE SUMMER vs CONCUBINE, CHILD!

「まずはだな……こうガキンとドガンとやつて……」

I S 実習の時間、一夏が専用機持ちに「コツ」を教えていた。

「そしてドキンとやつてバイバイキーンからのパイパイオツでボツキンキンで……」

「…」

「まあ適当ーにやつて感覚でやれば良いかな?」

「…」

「そして180。首を曲げて右足を320。にして…」

「…」

「…こうすれば勝てるよ、分かった?」

「「分からねえよ!!」」

「え何で?」

どうやら一夏の教え方に批判があるらしい（当然）。

まずは筈だつた。

「お前の教え方は擬音語が多すぎて話にならん！」

「はいブーメラン、鏡見てこいホウキングダム」

「感覚つて言つてもわからないわよ！」

「己を見ろパンダ」

「細かい数字が多すぎて分かりませんわ！」

「はは、何を言うかこのロードバナナは」

（何でこいつ性格真面目になつてないのよ！）ヒソヒソ

三人は固まつて話し合う。

（恐らく試合や実戦じやないと駄目なんだろう…）ヒソヒソ

（でもIS起動しているせいなのか半分ぐらい真面ですわ！）ヒソヒソ

（うーむ、ISが鍵なのかな？）

「一夏！ちょっと相手してくれる？」

振り向くとシャルルがいた。

「<sup>ジョーカー</sup>舞踏会と戦つてみたいんだ」

「シャルルか：いいだろう！」

（こ）で一夏のスイッチが入る。

(今度は100%ですわね……) ヒソヒソ  
 (基準がよく分からぬ!) ヒソヒソ

「よろしく頼むぜシャルル、新しい力を試してみたいんだ」

「新しい力?」

すると一夏はまた新しいデイスクを取り出す。

「鈴!」

すると一夏は鈴に向かって叫んだ。

「…何よ?」

「鈴さんと中国の力、お借りします!」

「は?」

「ジョーカー  
舞踏会! 曲目変更!」

すると「舞踏会の姿が変わる。その姿は…

「なつ…!?

「新世界の甲龍！」  
ネオシェンロン

鈴の甲龍シェンロンと瓜二つなのだから。

赤と黒のボディには龍のマークが描いてあり、刀はより一層大きくなっている。  
 「それが噂の能力だね！専用機の力を使える能力！」

「ああ、中々いかすだろ？」

「でも…他人の真似事で僕に勝てるかな！」ドツ!!

「ああ！勝てるさ！」ビュン!!

そして一夏とシャルルの勝負が始まった。

「冥無龍砲」

一夏が静かにそう捉えると…両肩から衝撃砲が…

「…えっ？」

発射されない。一夏は何もしてこない。いや、何もしなかつたように見えた。

「きやつ!?」

突如シャルルがダメージを受ける。一夏に攫われてもいよいよに。

「あの冥無龍砲つてのは私の龍砲のバージョンアップよね…もしかして！」

「ここで甲<sup>シェンロン</sup>龍の使用者である鈴が気付く。

「これが俺の龍砲…名付けて冥無龍砲！」

大きく手を広げて説明する。

「龍砲は砲身、砲弾が見えないが…冥無龍砲は全てが見えない！砲身砲弾は勿論、標的に当てるまで撃たれた奴も撃つた俺も気付かない！音さえ無いんだからな」

逆に、見えない物を当てる技術が必要である。一夏はそれを難なく行う。

「見せてやろう…俺の龍の舞をな！」

# 参戦したS C H W A R Z E R R E G E N !

「行くぜ！」

そうすると一夏は新しくなった青龍刀を構えた。

「双龍絶月!!」

それでシャルルに斬りかかる一夏、シャルルは近接ブレードでそれを受け止めた。シャルルはブレードで一夏を遠くまで押し、アサルトライフルで狙つた。

「はっ！」

ここで一夏は双龍絶月を繋げ、それを回転させることでビームを焼き消した。シャルルがまたダメージを受ける。先程の冥無龍砲だ。

（やつかいだね…冥無龍砲！）

するとシャルルは一夏の周りを飛びかう。止まる気配も無く、ただずつと縦横無尽の動きをしていた。

（冥無龍砲を撃ちづらくしてゐな…だけど…）

シャルルの進行方向に合わせて冥無龍砲を撃つ。見事当たり、動きを一瞬止めた。

それが、一夏にとつてのチャンス。

「今だつ！」

双天絶月により剣捌きをシャルルはギリギリ避け続ける。  
そしてブレードを一夏に当てた。

「くつ！」

一夏の剣勢を止めると、再び飛び回る。今度はマシンガンを撃ちながらである。  
一夏は双天絶月で何とか防ごうとするが、全ての弾は無理であり数発受けてしまつた。

(冥無龍砲を撃たせないつもりか！)

ここで一夏も動き回り、実質シャルルとの鬼ごっことなつた。  
「このままだと躊躇つことだ…なら！」

すると一夏はある物を展開する。それは龍の頭の形をしたピット二機。  
龍ピットはシャルルの周りを周回し、小さな冥無龍砲を撃ちまくつた。  
「龍砲のピット…名付けて『龍の双子』!!」

見えない弾に翻弄されるシャルルだが、近接ブレードで遠くへ弾いた。  
「いや…そろそろ終わりだ！」

すると龍ピットは肩にある冥無龍砲の銃口と合体した。

「まさか……」

「喰らえ!!冥無逆鱗砲!!」

弾は見えない。しかし先程とは比べものにならない冥無龍砲のサイズというのは分かつた。

何故なら、既に自分は吹っ飛ばされていたのだから……

「凄いじゃないか一夏！まさかこんなに強いなんて！」

「だろだろ？お前も良かつたぜ」

二人は地面に降り、お互いを認めて握手をしようとすると……

「!?」「!!」

二人の間にビームが走る。

撃たれた方向を見ると、レールカノンを向けてラウラが睨んでいた。

「何だボーデヴィイッヒ、いきなり撃つてきて」

「織斑一夏……貴様も専用機持ちだそうだな」

「まあこんなのが大量生産されたらやばいだろ」

「ならば話が早い、私と戦え」

「良いよ…でも今じゃ俺の勝ちになるぞ？」

「何を馬鹿なことを——!?」

ラウラの I Sが勝手に解除される。

「言つただろ？ ハツキング機能が制限されてない今は…俺の勝ちになるつて」

「貴様……！」

「決着なら、クラスリーグマッチで決めようや」

「ふん！ 望むところだ!!」

こうしてラウラは姿を消す。

どうやら、強そうなのが来たらしい。

GERMANY GIRLのCLAIM!

「一夏」大丈夫？

更衣室にてシャルルが一夏の身を案じた。

「大丈夫大丈夫。この通りピンピンしてコロンブス！」

それを逆立ちして答える一夏。もう性格は元に戻っている。

「いやあ僕は先に戻るね」

「何かお前ここでシャワー浴びたからなによな」

「益」、着替：「ののび」、「のぶ」、一兼、一  
一

「えつ……とお……」

「そうつれない」と言うなつて！イツツ脱ぎ脱ぎタイムだ！」

そう言つてシャルルの肩に手を乗せると…

悲鳴をあげて部屋から立ち去る。

「……やっぱ原作通りの行動は嫌か…」

一夏は珍しく後悔したが…

「つーかあの反応…まさか」

そして何かを察した。

帰り道、一夏は今朝ラウラに叩かれたことを…

(張り手エメラルドングリ焼きそばつーーーー!!)

考えていいなかつた。

「答えて下さい教官！何故こんな所で！」

「何度も言わせるな、私には私の役目がある。それだけだ」

するとラウラと千冬が話し合っていた。

「こんな極東の地で何の役目があるというのですか！お願いです教官、我がドイツで再びご指導を！」

ラウラは必死に千冬を説得していた。

「ここでは貴方の能力は半分もいかされません！」

「ほお？」

ここで千冬の目の色が変わる。

「大体この学園の生徒など教官が教えるにたる人間ではありません！危機感に疎く、I Sをファツションか何かと勘違いしている！そのような者達に教官が時間を割かれるなど……！」

「そこまでにしとおけよ小娘」

「!!」

「少し見ない間に偉くなつたな、15歳でもう選ばれた人間気取りとは恐れ入る」

「わ：私は……！」

「寮に戻れ、私は忙しい」

「くつ……！」

ラウラは走つてどこかへ行つてしまつた。

「……そこの男子、盗み聞きか？異常性癖は感心しないぞ」

そう言つて木の陰から出て来たのは：

「ソンナンジヤナイデスヨチフユサン」

「何故貴様が!?」

舞妓・カルロスだった。

「イチカサンナラコノバヲワタシニマカセテイツテシマイマシタヨ」

「あの馬鹿…」ハア

「……サツキノラウラガイツタラシイ『弟とは認めない』ハ…アナタガニドメノユウシヨ  
ウヲノガシタノトカンケイアルノデスカ？」

「…一夏が気に病む必要は無い：そもそも今のあいつは気にしてないだろう」

「イイエ、ケツコウトラウマラシイデスヨ」

「そうか…そう言えば誘拐されてからだな…」

「？」

「一夏があんな風に変わったのは…」

「イマノイチカサンノコト、デスカ？」

「ああ、忘れもしないさ」

それは、一夏が誘拐された時に起きた。

# ONE SUMMERのPAST!

これは、織斑一夏が誘拐された時の話である。  
彼の姉である織斑千冬を第二回モンド・グロッソで優勝させないための人質であつた。

「よし、織斑千冬は大会に出てないな」「お前のおかげだぜ」

テロリスト達は一夏を殴っていた。それほど苛ついていたのだろう。  
「くつ…俺をどうするつもりだ!」

「さあな、生きるも死ぬもお前の態度次第だぜ」

その時だつた。一夏の頭上の瓦礫が今にも崩れそうである。  
案の定、瓦礫が崩れ、それが一夏の頭にヒットした。

「んがっ!?

一夏は気を失い、項垂れる。

「お、おい!?

「ふざけんなよ!! 勝手に死なれたら…」

男達は慌てて一夏の元へと駆け寄る。これで死なれてブリュンヒルデに恨まれたら  
たまつたもんじやない。

一夏を叩いて起こす。

「ん…?」

「お、生きてたか…よか——」

「ここにソフトクリームの両生類化を全ヒーターに宣言する!!」

「「…は?」」

一夏が急に立ち上がり、回り始めた。

「いいよいよ!! その豆腐に似たエリマキトカゲの三段階ジャンプすごくいいよ  
!!」

「「「は?」」」

「はい！ 織斑一夏は!! 今日!! 世界一ふざけた男になるマツシユ!!」

今度は拍手をしながら謎の宣言をする。

「普ーさんな男じゃないよ… ふざけた男だあああああああああああああ  
!!!!」 ドゴオ!!!  
「うげぼつ!!」

そして目の前にいた男を殴って気絶させた。

「てめえ!! 何しやが——」

「鼓膜の中の灯油切れバツタ聞こえますかつ———」

!!!???

「タコスツ!!」

もう一人を叩いて氣を失わせセキせセ：

「い、いい加減にし——」

「汗臭い鮪のチーズフォンデュ———」

ドドドド!!!

「サーモンツ!!」

また一人、氣絶させる。

「ひ、ひいいいいいい!!!」

残つた男達は逃げ出ハヤヒすがガ：

「逃がさんぞテレスドンめつ———」

!!!!

悪魔のような姿で、それを追つた。

「一夏! 無事か!?!」

そう言つて千冬が來た。彼女の目に映つたのは：

「回る♪回る♪カツパ巻きが♪自転回転♪」 グルグルグルグル

テロリスト達を紐で縛つて豪快に回していた一夏であつた。

「い、一夏!?」

「おう千冬シスター!! 助けに来てくれてあざーすアザトーストロール!!  
「ど、どうしたんだ一体…!?」

「今だ!! 気絶しろ千冬姉…………!!!!」

そうして千冬に飛びかかつたが…

「ふんっ!!」

「どげぬつ!!」

思わずISを起動した状態で殴つてしまつた千冬。

「しまつ!! 一夏っ―――!!」

瓦礫の中に埋もれた一夏を掘り返す千冬であつた。

## FRANCE GIRLのSECRET!

「ただい魔界のマスカット～!!」

一夏が自分の部屋に帰つてくる。

「シャルルは帰つて来たのか？」

どうやらシャワーを浴びているらしい。扉の奥から音が聞こえる。

一夏は自分のベットに座り、ランタンと大根を取り出す。

「さてと昨日の続きを：つてそうだ」

一夏はあることに気付く。それはボディソープをきらしていたことであり、それをシャルルに渡そうとした。

しかし、扉の前で立ち止まる。

「いくら俺がインフィニット・ストラatosの織斑一夏でも同姓のシャワー中に入るのは駄目か？」

そう思つていたが：

「まあこうでもしねえと話が進まねえな、おいシャルル～」

そう言つてシャワールームに入ると…

「…えつ」

「えつ」

男が本来持つていないはずの胸の膨らみをつけたシャルルがそこにいた。

「…ああつ！」

慌てて前を隠すシャルル。それに対し一夏も隠す。

「これ…チヨコレートアイス」

そう言つてボディソープを差し出し、部屋を出る一夏だつた。

シャルルが上がると、部屋は気まずい雰囲気になる。

「お茶でも飲むか」

「う、うん…貰おうかな」

そう言つて一夏はシャルルにオレンジジュースを渡す。

「……………ありがとう」

こうしてシャルルは自分の事について話してくれた。

「今まで嘘をついて…・・・ごめん」

「いいのか…それで」

「えっ？」

「良いはずないだろ!!」

一夏はシャルルの肩を掴む。

「確かに親がいなきやガキは生まれねえよ！だからといってそんな好き勝手ことできるわけねえだろ！」

「……」

シャルルは驚いた。普段見ている一夏からは想像できない熱さを感じたからだ。

「でも…女だってバレたから本国に呼び戻されるかな…良くて牢獄行きかも」

「大丈夫だろ」

「えっ？」

「I.S学園特記事項『本学園における生徒はその在学中においてありとあらゆる国家・組織・団体に帰属しない。本人の同意がない場合、それらの外的介入は原則として許可されないものとする』：つまりここにいれば三年間は大丈夫って事だ」「よく何も見なくて言えるね…全部55もあるのに」

「ここで、シャルルの顔に笑みが戻る。

「生徒手帳はもう消し炭だからな、全部覚えた」

(…何をしたんだろう)

「これからどうするか決めればいい、俺も相談に乗つてやる」

「一夏…庇つてくれてありがとう」

「いいつてことよ…」

「一夏もシャルルも、二人して笑つた。

「さてと…話もまとまつた事だし、いつものやるか！」

「いつもの？」

そうすると一夏は不思議な形をしたボタンを押す。すると箒が急に転送されてきた。

「えつ…」

「なつ…」

これにはシャルルも箒もびっくり。

「束さんが作つた『世界の何処にいても箒ちゃんを呼ぶスイッチ』…便利だなあ…」

そして一夏は別のスイッチを手に持つ。

「ま、まさか…！」

「シャルル、これからもよろしく！」 ポチッ

『3秒後に爆発します』

「「えつ——？」」

こうして、一夏とシャルルは廊下で寝るハメになつたとさ。

「な…まさか犬の小便博士の正体は…マシンガンドアノブ伯爵だつたとは！」  
(…うるさいなあ)

ちなみに寝言はシャルルが聞いてくれてる。

## ATROCITYなGERMANY GIRL!

とある日、アリーナに鈴とセシリ亞が訪れていた。

「あら?」

「早いわね」

「てっきり私が一番乗りだと思っていましたのに」

鈴はセシリ亞を睨む。

「私はこれから学年別トーナメント優勝に向けて特訓するんだけど」  
「私も全く同じですわ」

今度はセシリ亞も目を向ける。お互に向き合つた。

「この際どっちが上かこの場でハッキリさせとくってのも悪くないわね」

「よろしくってよ、どちらがより強く優雅であるか、この場で決着をつけてさしあげます

わ

「勿論、私が上なのは分かりきつてていることだけど」

「ふふん、弱い犬ほどよくほえると言うけれど、本当ですわね」

そしてそれぞれの挑発を受け、ISを起動させてバトルを開始しようとした瞬間：

「!?」

二人の間に砲弾が駆け抜けた。レールカノンによる物だ。

撃った方向には黒い雨を纏っているラウラがそこにいた。

「ドイツ第三世代機：シユヴァルツエア・レーゲン！」

「ラウラ…ボーデヴィイッヒ」

「どういうつもり?! いきなりぶつ放すなんて良い度胸してるじゃない!」

「中国の甲龍に…イギリスのブルー・ティアーズか」

二人のISを見て口角を曲げるラウラ。

「データで見たときのほうがまだ強そうではあつたな」

「何？挑発のつもり？」

「こつちは貴方以上の挑発を毎日受けていますのよ！」

「へいへーいイギリスバナナ！ どうしたどうした？ 黄色い紙がトラみたいに黒が混じつてるぞー？」

「あれれ、お胸塗り壁の鈴さん？ 胸筋のコンクリートが剥がれかけてるぞー？」

（（思い出したらムカついてき（まし）たわ……））

「ふん、下らん種馬を盗り合うような雌には人間の言葉は通じんか」

「今なつていた!?私の耳には『どうぞ好きなだけ殴つて下さい』と聞こえたけど!?」

「この場にいない人間の侮辱までするなんて、その軽口、二度とたたけぬようにして差し上げますわ！」

結果、二人とも我慢できなかつた。

「どつとと来い……！」

「一夏、今日も特訓するよね」

「おう、トーナメントまでファイヤーデイリーがナツシングナツシーだからな」

「一夏とシャルルが廊下を歩いていると……」

「第三アリーナで代表候補生三人が模擬戦やつてるつて！」

「！」

そんな情報が耳に入つた。

アリーナでは、観客がそこそことおり、セシリ亞と鈴、そしてラウラが戦っているのが見える。

篝も同じ場にいた。

ここで、鈴の龍砲をラウラが「何か」で防ぐ。

「A I Cか」

「知つてゐるのか」

一夏が淡々と言う。

「慣性停止能力だつけ？まあ脅威的だよな」

ここでラウラがワイヤーで二人の首を絞め、動けなくなつたところを殴り始める。「ひどい…これじゃアリンチだよ！」

「ああ…つて一夏は何処だ？」

「えつ？」

いつの間にか、一夏がいなくなつていた。

「この程度か…つまらん」

そう言つて嬶るのを続けようとするラウラだが…

「？」

甲龍の動きが急に精密になり、ラウラの拘束を解く。

「何これ…私何も動かしてないのに…」

「…まさか！」

ラウラが感づく。アリーナの外では、ジヨーカー 舞踏会の両手を部分展開した一夏がいた。

# 激震！ANGRYなONE SUMMER！

「随分と楽しそうじゃないか、俺も混ぜてくれよ」

そうすると一夏はブルー・ティアーズと甲龍シェンロンを操り、セシリ亞と鈴を隅へと避難させた。

二人とも息が上がっている状態だ。しかも傷だらけである。

一夏はシールドをハツキングで瞬消して、その隙にアリーナへと入る。

そして舞踏ジョーカー会を完全に展開し、二人の前に立つ。

「二人とも、よく頑張ったな」

「一夏さん：面目ないですわ」

「ごめん…アンタを貶されても何も出来なかつた」

「いいや…十分だ。ありがとう」

そう言うと二人を一緒に抱きしめた。

「いい一夏さん！」／＼／

「ちょっと!? 何すんの急に!?」／＼＼

「頼みがある。お前らのブルー・ティアーズと甲龍シェンロンを今だけ貸してくれ」「…えっ?」

すると一夏は二人を観客席まで運び、ISだけを操つてアリーナへと戻る。無人状態の二機が一夏の横に鎮座した。

「今度は貴様が相手か?」

「いいや、お前の相手はこの二機だ」

そう言うと一夏は二つの専用機を見せるように前へ出す。セシリシアでも鈴でもない、一夏の力だけで動かされている。

「一夏さん…」

セシリシアと鈴は医務室へ運び込まれていた。

ここで鈴がそつと呟く。

「…ていた」

「え?」

「一夏の奴、怒つてた」

鈴は見逃さなかつた。一夏のこめかみに浮かび上がつていた血管を。

「二機だけだと…貴様自身は手を出さないつもりか？」

「そうだけど?」

「なら…出させてやる!」

そうするとラウラはプラズマ手刀で二機に斬りかかるが、それを簡単に避ける。

そして甲龍シェンロンが青竜刀でラウラと対峙した。

「くつ…！」

その隙をブルー・ティアーズの射撃は見逃さない。的確にラウラに当てた。

ラウラは二機から離れ蜂のように飛びかう。それを甲龍シェンロンが追つた。

甲龍シェンロンが青竜刀を振るがA I Cで防がれる。

「このつ…！」

ラウラは二機をワイヤーで拘束し、アメリカンクラッカーの様に振らしてぶつけ合つた。

「調子に…乗るなあ!!」

ここでラウラは二機と一夏を完全に離し、そのまま地面へと着地して剣を向けるが…

千冬が刀を部分展開してそれを受け止めた。

「教官!?」

「やれやれ、これだからガキの相手は疲れる」

「千冬姉…」

「織斑先生だ。分かつているとと思うが…」

「本番でハッキング機能は使用禁止…だろ？」

「それでいい。学年別トーナメントまで私闘の一切を禁ずる。

解散！」

「くつ…」

ラウラは悔しそうにこの場を立ち去る。

こうして場は収まつた。

# BRUISEDなENGLAND&CHINESE G IRL!

一夏は戦いの後、急いで医務室に足を運んだ。

そこには包帯を巻かれ、ベットで安らいでいる2人がいた。どうやら命に別状は無いらしい。

しかし今の2人は痛々しい姿である。そう思うと一夏の拳が更に締まる。

「別に助けてくれなくて良かつたのに」

「あのまま続けていれば勝つてましたわ」

「馬鹿言つちやいけねえ、あんなジャイアン以上のリンチ受けて勝つなんて無理だエリザベスザマスゴクウブラツク」

「これには一夏も呆れて溜息を吐く。」

「2人とも無茶しちゃつてえ！」

「UNREASONABLE？」

「2人とも、好きな人に格好悪い姿見せたから恥ずかしいんだよね！」ボソボソ

「そう言つて2人に水を渡し、笑みを見せるシャルル。

「ななな何を言つているのか全然分からぬわね！」

「べべべ別に私無理なんかしてませんわ！」

「つーか何でラウラオウとバトることになつたんだヨーヨーコマ射的」  
「こ」で一斉に水を吹き出す。

「そ、それは……」ゲホゲホ

「まあなんと言ひますか：女のプライドを侮辱されたから……ですわね」

「そんなのいつも俺がやつてんじやん」

「自覚があるのならするな!!」

「ああ！分かった！」

「こ」でシャルルが気付く。

「もしかして一夏のことを……」

「！」

「こ」でシャルルを取り押さえる2人。

「あんたつて本当一言多いわね！」

「そうですわ！まったくです！」

「これら、学校の医務室で女子二名が男子一名を襲うなんて事案を起こそすな」

すると一夏が2人の肩に強めのチョップを当てる。

「いつたあ!?」

「やっぱ無理すんな、ホースディアーダなあ」

「「ホースディアーハー!?」」

「もしかして…『馬鹿』って言つてるの?」

「それそれ、シャルルよく分かつたな」

「誰が馬鹿よ! 馬鹿!」

「おい俺は人を馬鹿にするのは好きだが他人に馬鹿にされるのは嫌だ」

「めっちゃ身勝手!?!」

「これ以上俺に暴言言うと爆発オチの標的が筈からおめえらになるぞ」「…」

(あ、静まりかえった)

「だから…あまり俺を心配させんな」 ハア

「ここで3人は違和感を感じる。

(これつてもしかして…)

(私と鈴さんを気遣つている…)

(へえ…意外)

その言葉を聞いてシャルルは少し驚き、後の2人は赤面した。

すると地震のように部屋が小刻みに震える。

そして沢山の女子生徒がなだれ込んできた。

「何だ何だ!!」

「どうしたの皆!?」

「織斑君!」「デュノア君!」

「「「「私と組んで!!」」」」

そしてその全員がお辞儀して手を差し出した。

# 申し込まれるPARTNER！

『今月開催する学年別トーナメントでは、より実践的な模擬戦闘を行うため2人組での参加を必須とする』

一夏が渡されたプリントを読み上げる。

『尚ペアができなかつた物は抽選で選ばれた生徒同士で組むものとする』

「私と組も！織斑君！」

「一緒にやろデユノア君！」

「いいや！私と組んで！」

「良いけど、俺と組んで後悔しない？」

「…えつ——？」

「俺は君達をゴミ屑にする事も可能なのだよ」

静かな医務室に、一夏の高笑いが響く。

「…私と組も！デユノア君！」

「…一緒にやろデユノア君！」

「いいや！私と組んで！」

「是非私と！デュノア君！」

「織斑君！私はそれでも構わないわ！」 ハアハア  
「デュノア君は私と組むの！」

一斉にシャルルの方へ行く女子生徒。

それを見てムスッとなる一夏だつた。

「何故俺を避ける…」

（（自分が脅したくせに：））

「ええと…」

ここでシャルルが言い詰められて困つていると…

「悪いな、シャルルは俺と組むんダルタニアン」

「？」

シャルルにとつて初耳である。

慌てて一夏を見た。

「何だく織斑君と組むんだく」

「がっかりく」

「お願い織斑様！・どうか私をく！」

「織斑×デュノア！これはありね！」

「そうしてトボトボと帰る女子生徒達。騒動が治まつた。

「あ、あの一夏…」

「一夏！私と組みなさいよ！幼馴染みなんだから！」

「いえ！クラスメートとして私が！」

ボロボロの2人が一斉に一夏に言い寄るが…

「駄目ですよ」

「「！」」

真耶が部屋に入つてくる。

「お二人のＩＳ、ダメージレベルがDとCの間ぐらいなんです。トーナメント参加は許可できません！」

「十分戦えます！」

「私も納得できません！」

「駄目と言つたら駄目です！これから修復に集中しないと後々重大な欠陥が生じます

よ」

真耶に言い負かされる二人。どうやら諦めるしかない。

「「うつ…」「」

「良いあんた達、絶対あいつに勝つてよ！」

「私達の弔い合戦をお願いしますわ！」

「まだ死んでないわよ！」

「おう、任せておけんだマジック痺れステッキ！」

「二人の気持ちは無駄にしないよ！」

「こうして意気揚々となる二人。

すると一夏が部屋を出ようとする。

「一夏？どこに行くの？」

「いや火薬の準備をだな」

「「「「…………えつ？」」」

「次の話俺の部屋でやるから箒爆発させないと駄目じやん？だから」

「こうして一夏が走り去る。そしてシャルルが一人に話しかけた。

「…………二人とも」

「……何（ですか）？」

「今日泊めて」

「二人はしばらく黙るが…

「いや、男と同じ部屋は…」

「…………だよね」

「…………た。」  
いつそこの場で正体明かして泊めて貰おうかな、マジでそう考えたシャルルであつ

# 史上最大のINVASION!

「あ、あの一夏?」

「帰りの途中、シャルルは沢山のダイナマイトを抱えた一夏に声を掛ける。

「お、遅くなつたけど…助けてくれてありがとう」

「Did I do something?」

「保健室でトーナメントのペアを言い出してくれたよね。僕凄く嬉しかったんだ」

「Oh, that?」

「…さつきから何で英語なの?」

「Ah……すまんすまん翻訳機が壊れてた」カチカチ

「そ…そ…う」

「まあお前が他の誰かと組んだら女つてバレそうハレルヤだからな」

「優しいね：一夏は」

「これ見ても同じこと言えるか?」

「そう言つて大量のダイナマイトを見せつけてくる一夏。」

「……………優しいね一夏は」

「あつはい」

すると一夏の携帯が鳴り始めた。

「どうしたカルロス」

『イチカサン、ホウキサンガガクエンカラニゲダシマシタ!』

「何い!?」

『ドウシマスイチカサン!?』

「……仕方ない、レベルハザードで捕まえるぞ!」

『ラジャー!!』

「じゃあ、シャルル、俺行つてくる」

「あ…うん、頑張つてね」

ここでシャルルは、今夜の野宿を覚悟する。

どこかの司令室にて

「司令入りました!」

司令と呼ばれた一夏が司令室に入ると、そこには数百人の変態達が敬礼していた。

暫くすると各自の位置に戻る。

「目標は？」

「ショッピングモールに逃げ込んでいるようだぜ！」

そんな一夏の補佐をするのは堀堀マウンテンである。

「よし！俺の部屋で爆破するのは諦めた！ショッピングモールで爆破を行う！」

「「「了解!!」」

「兵力はどうなっている？」

「はい、全長100m、重さ10万トンを誇るマンモス戦車タンクに対大型篠ノ之等用ミサイル搭載戦闘機がそれぞれ1000機です！」

「：足りんな：衛星レーザーも用意しろ！」

「了解！」

「司令！市民の避難がまだ終わっていません！」

「構わん！奴が第三形態になる前に発射だ！」

「了解！」

「これより作戦を実行する！皆の者、行くぞ！！」

「「「「「了解!!」」」」

「はあ…はあ…ここまで来れば良いだろう」

箒は必死に誰もいないショッピングモールを駆け抜ける。

「そう何度も爆発に巻き込まれたら溜まらん！」

するとどこからか火花の散る音が聞こえる。

「何だこの音は!?」

箒が見たのは、自分目掛けて走る電車であつた。

そして…爆発した。

「無人在来線爆弾が当たりました！」

「よーし、全て発射!!!」

一夏の合図と共に全ての戦車、全ての戦闘機が攻撃を開始した。  
目標は勿論箒である。

「撃て撃て！奴に賢者の石を使わせ続けろ！」

「R1号発射ア!!」

「ヘル・アンド・ヘブン！」

「ナマケモノ砲発射用意！」

「波動砲も準備完了です！」

「スカラーシステム発動！」

躊躇無く箒に攻撃が来る。

爆発は收まらない。キノコ雲も直ぐに焼き消された。

「な、何故私が…」

その内箒は塵となり、ショッピングモールの瓦礫に埋まつたとさ。

「マシンガンドアノブ伯爵…何故牛乳を…レンジで温めたんですか？」

その日、一夏は珍しく悪夢を見たという。

ZZZ

# 決戦！ONE SUMMER PAIR VS GER MANY GIRL PAIR!!

学年別トーナメント当日、一夏とシャルルは更衣室で着替えていた。

一夏はアリーナの観客席の状態を映像で見ていた。

「しかし偉そうな人が沢山来てんない」

「偉そうじや無くて偉い人だよ、三年生はスカウト、二年生は一年間の成果、それぞれ人が来てるんと思うよ」

「ご苦労なこつたコラッタ」

「まあ……一夏のこともあるんじやないかな？」

一夏の舞踏会(ジョーカー)は、その性能、操縦者、全ての面で世界各国から注目されていた。  
それを狙っている者も少なくは無いだろう。

現にブルー・ティアーズと甲龍(シェンロン)の事でイギリスと中国から怒りを買っている。

「一夏、夜道には気をつけた方が良いよ」

「そうだなあ、イギリスと中国、デュノア社から狙われるからな」

「…デュノア社?」

「お、対戦相手が発表されたぞ」

先程の映像に重なつてトーナメント表が映し出される。

「なつ…!?」

「あらま」

そこには、一回戦で一夏&シャルルとラウラ&篠と当たつていた。

アリーナの中心で、4人がISを起動している。

一夏ペアとラウラペアの試合が始まるからだ。

観客席からは歓声が聞こえる。

「イチカサーン！ ガンバツテクダサイー！」

「負けたら承知しねえぞ大将！」

「……」シユコー シュコー

「司令ー!! ファイトー!!」

「oooooooooooooo!!!!」

ちなみに数多の変態共が結構スペースを埋めている。

「あの人達：部外者じゃない？」

「脅したら観戦認めてくれたよ」

「誰を！」

一夏とシャルルが喋っている中、ラウラが割り込んでくる。

「一戦目で当たるとは、待つ手間が省けたというものだ」

「俺と戦うのがそんなに楽しみだつたか？モテる男は辛いね！」

「…………その減らず口も今日までだ!!」

一夏を指すラウラ。その表情は怒りの色になつていた。

「貴様のようなふざけた男、教官の弟とは認めない!!」

「認めなくともいいよ」

「なつ!?」

「別に俺は『織斑千冬の弟』なんてものを称号として掲げているわけでもないからな」「そのような覚悟だから教官は弱くなる！あの人の弟だということをもつと強く自覚しろ！」

「お前こそ自覚しろよ：お前の『私の中の教官』はただ一方的な崇拜ということを！」

「…良いだろう！貴様を倒して、あの人との真の強さを証明する！」

「じゃあ俺は、織斑おれ一夏の強さを証明してやる！」

「舞踏会！曲目変更！」

「ここで一夏は一枚のディスクを出し、それをセットする。

変化した姿は、シャルルのラファール・リヴィアイヴ・カスタムⅡと酷使していた。

「新世界の疾風!!」

# DOUBLE REVIVES!

観客席が騒然とする。

アリーナにいるのは、二つのリヴァイヴ。

最も一夏の方はパワーアップしているのだが。

(デュノア社に狙われるつてこういうことだつたんだ)

恐らく新世界の蒼い雲や新世界の甲龍と同様く国や会社に許可を取つていないのでろう。

「俺がラウラをやる。お前は筈を頼んだ」

「え？ 単独じやAICに勝つのは無理だと思うよ？」

「策があるんだ。信じてくれ」

「…分かった！」

カウンタダウンが終わると同時に、試合開始。

一夏に恨みのあるラウラは一夏だけに集中した。

「どんな変身をしようと、私の停止結界の前では無力だ！」

「それはどうかな!?」

「ここで一夏はアサルトライフルを構え、発砲した。  
【スーパー・ノヴァ】  
七色の花火!!」

そのエネルギー弾はゆっくりと空中を浮遊し、爆発して炸裂弾となる。

弾数は数えきれないほど、ラウラは停止結界で防ごうとしたが…

「ぐわっ!?」

すぐに消えてしまう。

ラウラの停止結界は確かに使いようによつては無敵だが、対象外からの攻撃には弱い。つまり複数の攻撃が弱点なのだ。

乱射などは弾が束になつてから防げるが、今の炸裂弾は四方から銃撃が来るから不可能なのだ。

「小賢しい！」

プラズマ手刀で斬りかかるラウラ。しかし一夏はそれを華麗に避け続ける。

「逃げ切れない流星!!  
【スパークエイジ】

一夏は誰もいない所へ発砲する。そのエネルギー弾はラウラに向かつた。

「誘導弾か！」

今度こそ停止結界で防ごうと思つたが…

「何!?」

エネルギー弾が停止結界を避けて向かってきたのだ。  
ラウラはその誘導弾から逃げる。しかし超スピードで追つてきたので被弾してしまった。

そしてシャルルがラウラに向けて銃撃をした。どうやら箒を倒したらしい。

「一夏！」

「シャルル！俺に合わせてくれ！」

「うん！任せて！」

そう言つて2人は2本の槍を構え、ラウラと対峙した。

「灰色の鱗殻!!」

「グレー・ハーレー  
グレイスケール

「灰色の水星!!」

「グレイド・ビアス  
シールド・ビアス

「なっ!?」

「うおおおおおおおおおおおおおおおおおお!!!!」

そしてその隙に一夏が思い拳を入れた。

その後に何度も攻撃する。

(こ、この私が負けるだと…!?駄目だ！私は負けるわけにはいかないのだ！)  
(寄越せ力を！比類無き最強を！)

次の瞬間、ラウラに異変が起これり始めた。

# CAN, T STOPなラウラ！

「なつ…!?

「んー?」

ラウラの急変ぶりにその場に居合わせた全員が驚く。  
シユヴアルツエア・レーゲンの装甲はドロドロになり、大きな人影へと姿を形成する。

「ありや雪片か…?」

巨大な姿となつたラウラがアリーナに現れた。  
しかし、一向に動く気配がしない。

「な、何あれ…!?

ここでシャルルが近づく。今のラウラに怯えているようだ。  
「分からん…だが、ちよつと試してみたいことがあるな」

「試してみたいこと?」

「ジヨーカー 舞踏会!  
スタイル 曲目変更!  
ネオブルー 新世界の蒼い雲!!」

ここで一夏はブルー・ティアーズの姿となり、ピットで射撃してみる。  
それを難なく受け流したラウラは、一夏に向かつて剣を振る。

「ぬおつ!?

弾き飛ばされた一夏は、アリーナの壁に激突する。

「いつつ……このつ!」

起き上がった後、右腕をラウラに向けて伸ばすが、対象に変化は無い。  
(ハツキングも効かんか? :)

対するラウラは、微動だにしない。一夏に追撃もしなかつた。

「一夏! 大丈夫! ?」

「怪我は無いか!? 一夏!」

シャルルに加え、筈も来る。

一夏に大した傷は無い。しかし重い一撃を食らつてしまつた。

「あいつ……武器と攻撃に反応するだけで自分から攻撃はしない自動プログラムか? :」

「ハツキングは? 試したの?」

「それが全く効かなくて: 困つたもんです」

「ここは先生方に頼んで私達は逃げるぞ!」

「いや……俺は残るぞ」

「!？」

「その言葉に2人は驚く。

「馬鹿を言うな！お前がやることなんて何も無いぞ！」

「そうだよ！ここは危険だ。だから…」

「俺も『あれ』の正体は分からぬ：だからラウラの状態が分からぬんだ！」

「…状態？」

「…もしも『あれ』が人体にとつて危険だつたら？命に関わる物だつたらどうする？」

「そつか、ボーデヴィイツヒさんの安否も…」

「だが！あの女はお前のことを…」

「関係無い！例え俺を嫌ついても助ける！」

「一夏は考える。今持つてゐる物でどうやつたらラウラを救える？

自分はどうすればいい？

「…そうだ！」

「ここで名案を思いつく。一夏はとある人物と連絡をする。

「もしもし…東さん？」

「なつ!？」

その名を聞いて筍は驚く。それはIS開発者でもあり実の姉でもある篠ノ之東の名

だからだ。

『何ういっくん!』

「確かに、国は俺のために専用機を用意したらしいですね」

『そららしいねう』

「…そのISのデータを盗んで、ディスクにしてくれません?」

『それならお安いご用だよ!少し待つてねう!』

「なら…俺は時間を稼ぎます!」

# ONE SUMMERのNEO WHITE!

「曲目変更!! 新世界の甲龍!!」

一夏は双天絶月でラウラを斬る。しかしその斬り口は直ぐに埋まってしまう。  
ラウラの剣が一夏を襲う。一夏はそれをギリギリのところで避けた。

「冥無龍砲」

一旦離れ、冥無龍砲をラウラに撃つ。ラウラはそれに反応できなかつた。

(攻撃に反応して動く: だけど見えない攻撃にはしないのか)

しかし今においてあまり意味をなさない。今回の目的は対象を倒すことではなく、  
間を稼いで中身を助けることだ。必要以上に弱点を突かなくともいい。  
「ここで一夏はスピードで相手を翻弄することに決めた。

「曲目変更!! 圣雷!!」

一夏は聖雷に変わり、圧倒的な速さで地面を駆け抜けれる。

「雷落とし!!」

雷撃の踵落としを決めた。だがラウラは少し躊躇けただけである。

負けじと一夏は速い猛攻でラウラを攻め続ける。

「曲目変更!! 新世界の蒼い雲!!」

（こ）で一夏はセシリアのＩＳと同じ姿になり、八機のピットを乱射する。その銃弾にラウラは鬱陶しそうに剣で払う。しかし数弾はヒットした。

「上見てみろよ」

そしてラウラの真上には、操られた大量の打鉄で形成された大きな拳がある。

「鉄屑の銀河!! 鋼鉄の隕石!!!」

その拳は、ラウラ目掛けて墜落する。

しかしその攻撃を受けても、ラウラの暴走状態は続いている。

「ちつ…ただの攻撃じゃ駄目か?」

一夏が考えている時、束から通信が入った。

『いつくんできたよ!』

それは、先程頼んだ新形態のデイスクだ。

いつの間にか、持っていた真っ白なデイスクに色が付いている。

「サンキュー束さん! 早速使わせて貰うぜ!」

そして、そのデイスクを入れた。

「曲目変更…」

スタイルチエジ

ス

タ

イ

ル

チ

エ

ジ

ン

ジ

ン

ジ

ン

ジ

ン

ジ

ン

ジ

ン

ジ

ン

ジ

ン

ジ

ン

ジ

ン

ジ

ン

ジ

ン

ジ

ン

ジ

ン

ジ

ン

ジ

ン

ジ

ン

ジ

ン

ジ

ン

ジ

ン

ジ

ン

ジ

ン

ジ

ン

ジ

ン

ジ

ン

ジ

ン

ジ

ン

ジ

ン

ジ

ン

ジ

ン

ジ

ン

ジ

ン

ジ

ン

ジ

ン

ジ

ン

「新世界の白式!!」  
〔ネオピヤクシキ〕

「あの姿は……！」

ここで通信室の千冬が声を漏らす。

その姿は、国が一夏に用意していた  
（ならば…『あれ』がある筈…！）

「白式」を真似ていた物だつたからだ。

『織斑！』

千冬は一夏に通信する。

「千冬姉？」

『もしかして…武器に「雪片」はないか？』

「雪片…これが！」

一夏が出したその刀、名を「雪片 終型」。千冬の「雪片」を改良した物であった。

『貴様の舞踏会は形態変化するときワンオフアビリティーも変化するらしい。恐らく今  
のアビリティーは私の零落白夜と同じになつていて。それなら奴を救える』

「本当か！」

それを握り、ラウラと向かい合う。

「どうやら俺は、世界最高の姉を持つたらしい！」